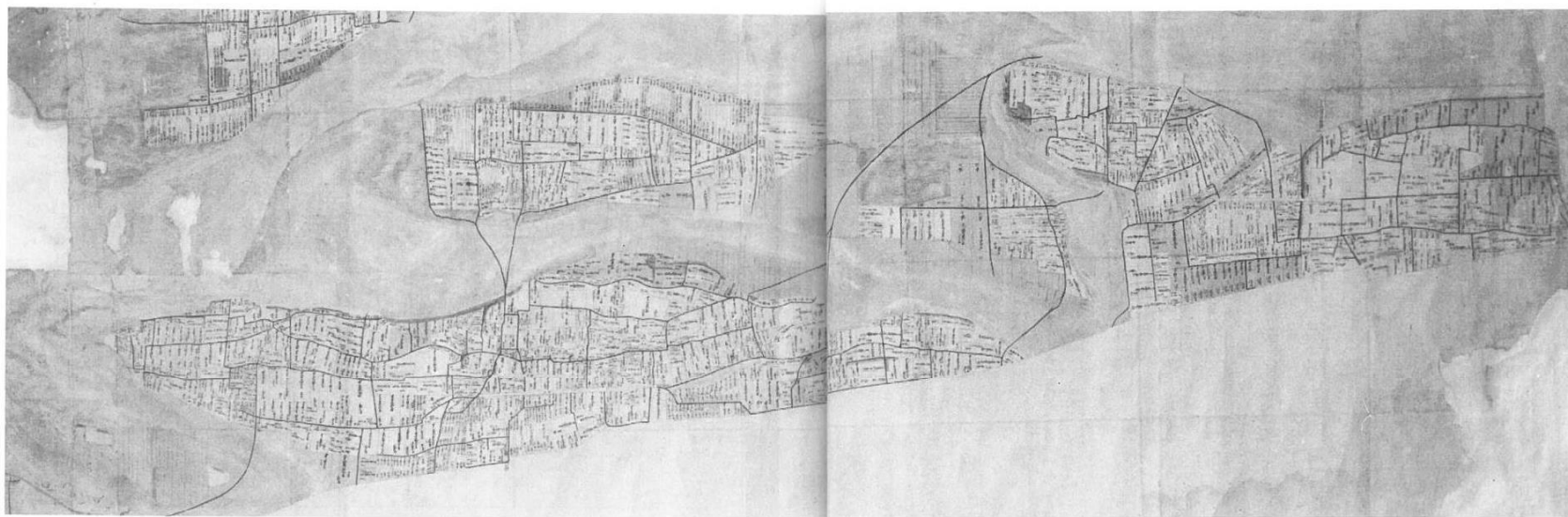
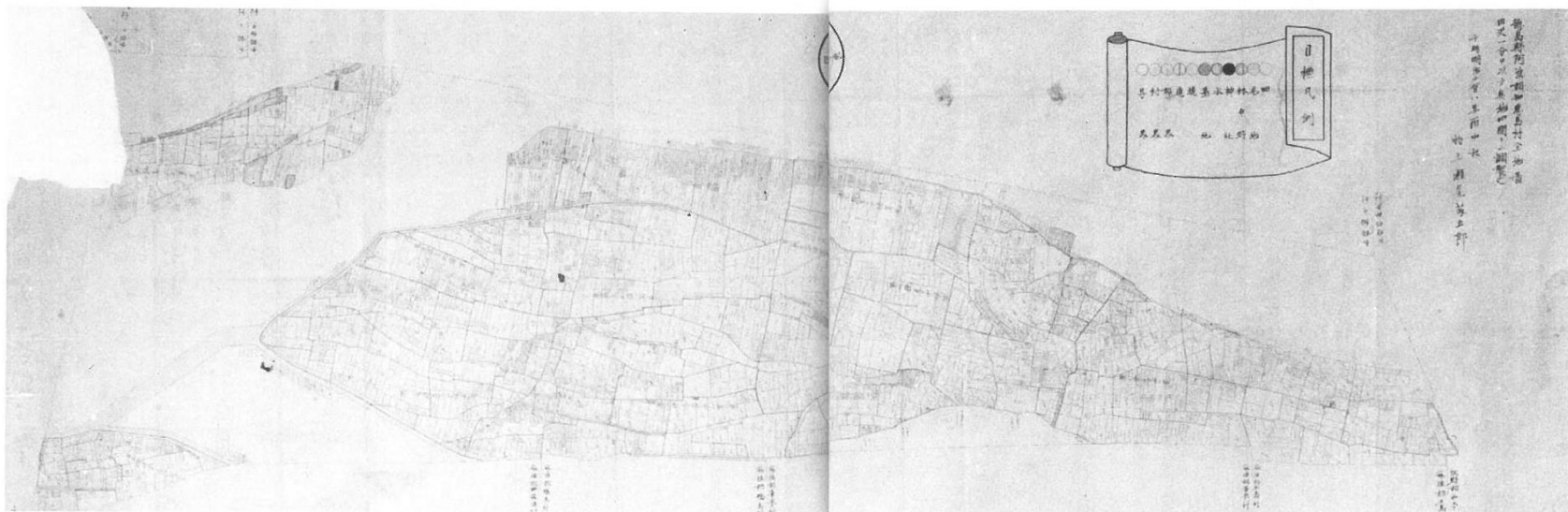


知恵島村地図 (元禄年間)



知恵島村地図 (明治十八年)



第三節 産業の発達と世の中のうつりかわり

1、藍から桑へ

21ページの下の欄の知恵島村の地図は、明治十八年の製作であり、当時の様子(道路、宅地、畑、番地、墓地、林原野、堤)がよくわかる。

地区	戸数
四ツ屋	47
中須賀	44
中須賀北	0
中須賀西	3
千田須賀東	57
千田須賀西	27
北須賀西	23
北須賀東	23
大北須賀	15
西知恵島	29
計	268

宅地の数をもとに地区別戸数を推定したのがこの表である。こうした地図をながめると、そこに住んでいた私たちの祖先の人々のくらしが、目の前に浮かんできて仕方がない。百姓は一生耕作に励んでおればよい。ぜいたくな遊びや楽しいことは縁遠い。したがって旅も容易ではなく、見聞もせまく考え方も古く、幾百年も昔のままの質素一点張りですべて籠の鳥のような天下泰平の生活をくりかえして

いた。四国巡礼やお伊勢参りが一生一代の願いであり、それもできた人は稀で夢物語りの人がほとんどであったようである。

そこにある物がそのままの姿で、ほとんど昔のままがかわりがない。何代も前からそこに生まれて育って、黙々と耕してやがてこの土に帰する。毎年同じ人が同じ頃同じ田畑で、同じ農具を使って同じ作業に精を出す。去年したように今年もまたくりかえすのである。親ゆずりの野良着をつけて仕事をする息子の姿は、頬かむりの恰好から所作までが、死んだ親父さんにそっくりそのままに受けついでいる。

去年植えた田に稲が実り、畑に「さとうきび」の背たけを伸ばし、いつもの頃に生長した藍が鎌で刈りとられていくわけである。この地図に示されている畑には「さとうきび」や藍が植付けられ、農家における換金作物としてどこの家でも



藍の神様の掛軸

いる畑には「さとうきび」や藍が植付けられ、農家における換金作物としてどこの家でも

作られていたようである。

蜂須賀家政が播磨から藍の種を移して、呉島(上下島を中心として飯尾、西麻植、牛島に当る地域)に試植したといわれているが、このあたりは吉野川の氾濫のため、肥沃な泥土が洪水毎に堆積したので特に藍作に適していたのであろう。



七條家にのこっている製造元のしるし

旧曆のお大師さんのころに苗床を作る。苗が15cm位になったころ畑に移植する。成長した葉を刻んで夏の太陽の下で乾かし、「からさお」で打ちたたたく。風やりや箕で茎と葉をよりわけ茎はすてる。葉藍を寢床に集めて、これに水を加えて何度も切り返えし、丸白まるしろに入れて搗きあげて藍玉として、荷作りをして製造もとの印をつけて売り出すのである。

阿波唯一の特産物として、阿波藍商人の手によって全国に出荷されていく。(伊予がすりの本

場の伊予、備後がすりの広島、久留米がすりの福岡、大島がすりの鹿児島)「藍作はお金になる」こうしたことで藍作りは盛んになる一方である。吉野川の自然客土の恩恵と、全国的に販路を持つ藍商人の活躍と百姓の換金作物への魅力に支えられ、その収穫の増加は藩財政収入源にも連なり、阿波の特産品にのし上っていったのである。

しかし、今までのように唯々働けばよいというだけでなく、「藍は儲かる」という先見的視野より、作付面積を拡大していく豪農や、その藍玉を仕入れて販売していく藍商が「おぶげん者」とよばれるようになったのもこの時代であり、どんぐりの背くらべの時代から、産業の発達と共に世の中が大きく動き出し、変わってきたのもこのころからである。

藍作に適した農地をもつ大農家は、藍の処理場としての大きな「ねとこ」を建て、番頭や作男や下女達多くの雇傭人をやとい、その居間として「番屋」や「ひろしき」を作り、住居には多額の費用をかけて、堂々たる母家を中心に客室まで構え、白壁の塀をめぐらせたたりした邸宅が各所に点在し、威勢のよい藍作地帯の風景と裏はらに、その日暮しの農民が大多数で、労使の生活

差を深めていく社会が出来上っていった。

知恵島村	
一、 <small>明暦一延寶</small> 瀬尾佐次兵衛 <small>庄屋</small> <small>延寶二年正月歿</small>	二、 <small>延寶</small> 同 七太夫 <small>同</small>
四、 <small>天明一寛政</small> 同六郎兵衛 <small>同</small> <small>實曆七年十一月歿</small>	五、 <small>文政</small> 子 同辨左衛門 <small>同</small> <small>安永三年十一月歿</small>
七、 <small>天明一寛政</small> 子 同賀七郎 <small>以上七代</small> <small>慶應一明治</small> 同 今瀬尾後雄 <small>同</small> <small>文政一</small> 八、瀬尾易兵衛 <small>同</small> <small>文政一</small> 九、 <small>慶應一明治</small> 子 同貞五郎 <small>同</small> <small>慶應二年五月歿</small>	
一〇、 <small>明治五年八月歿</small> 弟 同彌壽平 <small>同</small> <small>以上三代今瀬尾半次</small>	一一、 <small>明治</small> 瀬尾快右衛門 <small>同</small>

知恵島村の庄屋の一覧表

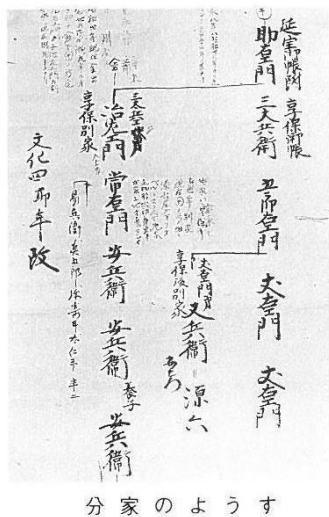
このような豪農や藍師が集落の指導者となって、明治のはじめまで庄屋や五人組の要職を世襲していくのである。どうして世襲していくのであろうか。このへんのことを青木幾男氏はこう話してくれた。

一度庄屋や五人組になった人を、その職を親から子、またその子というように、その家に生まれた者がその職をついでいく。集落の人々はむしろそれを望んでいたらしい。長い経験をもとにして上司に対しても顔がきいて、一寸した無理でもきいてもらえたり、受け付けてくれるということ、地域住民の利益につながるの、当り前と解釈し何の異議もない、それが封建政治であった。知恵島地区でも「古政」と呼ばれている家がある。世の中の大き

な変動は人々を不安におとし入れることになり、変化を嫌い平穩無事を願った世相の現われであろう。

なお、阿波藍の隆盛と共に、それにかかわる産業が発達し、人々のゆききもはげしくなり、八本松、麻植塚、鴨島等の町並がこうして発展していくのである。

昔は惣領(長男)に生まれた者は、釜の灰までといわれ親の財産を全部引きつぐ。次男以下は分家するか、養子や嫁にやるかである。分家させるといっても住む家を建ててもらっただけでは生活が出来ない。土地もわけてもらわなければ生計がたたない。みだりに田畑を分けていては、本家も分家も共に倒れてしまう。世によくいわれる「田分者」となるわけである。そんなことから推察しても、皆がみな分家してもらったわけではなさそうである。



どんな職業の家に生まれたにせよ、親の職業を引き継ぐのがあたりまえであり、家業を引継いで五十年もたてば、長男も四十の坂をこえ、次男も生計が立つようにしてやり、娘はみんな嫁にやり、孫達も成年になろうとしているところである。

我が身を粉にして働きどおしの一生。振りかえってみると、「せこかったなあ、ばあさん」。仕事は全部子どもたち夫婦にまかせ、財産の名儀もゆずって、老後を楽しく暮りたいと考えるのは、苦勞したものだけれども願いでである。若夫婦と可愛い孫達に囲まれながらも、離れ座敷で世俗にかかわりなく気安い生活(楽隠居)をした人は、集落でも一人あるかなしである。大部分の老人も若い者と一緒に仕事に励んで、足腰が立つ間は死ぬまで働きとおしたものである。

明治三十五年ごろになって、全盛をきわめた藍作りも、化学染料の輸入によって衰えはじめた。藍作りに見切りをつけた農家は、桑を栽培して養蚕に転換した。またたくまに全村の畑は桑園にかわっていった。

西知恵島の石川、河野氏は桑苗業をはじめて、県内は勿論、四国一円に出

荷していた。

西麻植に工
藤館蚕種合名
会社が誕生し
たり、佐渡、
筒井、笠井、



養蚕の神様の掛軸

松浦、河内、岡本等の製絲工場が建てられるなどして、鴨島地区が商工業化していく。周辺の村々では養蚕業で生計をたてる家が多くなった。

このように長らく続いた藍ブームに別れをつけて、新しく養蚕業と製絲工場の発達に伴ない、農家の仕事の様子も大きな変化をうけ、特に商工業の発展は働く職場の拡大につながり、世の中の変化を一層早めていくことになった。

次の表は明治、大正の頃の結婚縁組の範囲の概要である。大部分はお見合い結婚であり、仲人がお互いの相手を探してくれるのである。隣りのおばあさんの実家の近くの娘を、うちの裏の息子さんにちょうどええ、といったぐあいには結ばれていく。村に一人や二人ぐらい仲人が好きで、走りまわって世話をする人がいた。農業の外に商工業の発達によって職場がふえ、人の交流や交際が広がって、恋愛結婚もあちこちにみられるようになってきた。

地区	どこから嫁にきたか	どこへ嫁にいったか
穂山地	神山町の左右内や阿川など	鴨島、川島、板野郡
飯尾・敷地	阿川、左右内など神山町	石井、徳島、板野郡の平地で東北の方
西麻植	近郷から(但し吉野川北岸からは少ない)	近郷や大阪方面、山分や吉野川北岸
上下島	森山、牛島、喜来、山瀬、川島、川田	西麻植、敷地、学など平地
鴨島	吉野川北岸からは少ない、主に鴨島より東の方からが多い	町内は少なかった
森山	地域内や阿川、広野、東山や周辺の村	周辺の町村
牛島	名西郡や美郷村等山分も多い	徳島、阪神等生家より東方が多い
上浦	名西、名東、麻植郡一円	名西、名東、麻植郡一円
知恵島	神山、美郷等の山分や吉野川の北岸	周辺の町村、徳島や阪神

2、吉野川の改修工事

江川はもと吉野川の本流であって、毎年下流一帯は水害に見舞われて大被害を受けていて、上流の知恵島けん崎より南西に向かつての長いえん堤作りは、地域住民の願望であった。21ページの知恵島村地図を見ると、低いなが



おせきより東方をのぞむ

らも堤防が記されている。明治十九年、九十六万円の経費をもって十一か年計画で着手したが一か年で中止になり、その後住民の出資で明治三十二年築堤し、更に明治四十年から大正十五年までの継続事業まで、吉野川南岸の改修工事(本県土木工事史上はじめての大工事)が、国の直営で一二〇〇万円、延人員三八一八万人を要して完成した。

この工事によって吉野川の流れがかわり、知恵島地区の和平塚(大北須賀)は、吉野川の中

にのみこまれてしまった。(柿島村誌より)

改修工事の完成によって、毎年の増水のために被害を受けていた江川の低地帯にも、いつとはなしに住宅がたちならぶようになった。

また知恵島の西から東までが堤防に守られて、水害のない住みよい場所になったので、住みつく人も多くなって、地域は急に開けていった。

3、都市化する鴨島町

明治三十二年に徳島鉄道が鴨島まで開通し、牛島、鴨島の駅前集落が発達し、反対に駅より遠い八本松、麻植塚、飯尾などの地域の発達がとりのこされるようになった。

鴨島には片倉製糸工場や筒井製糸工場や繭まゆ検定所、蚕業試験場もできた。その上に菊人形や江川遊園地などの行楽施設もでき、交通機関も発達してきた鴨島の町は、小規模ながら一応都市の形態をもち、まわりに農村地帯をかかえながら、吉野川中流域の南岸における商工業の盛んな地域として、大きく躍進していく素地が出来上ってきたのである。

第一節 農 業

Ⅰ、江戸時代及び明治時代以降の農業

イ、江戸時代(藩政時代)の農業

藩政時代の農業は、吉野川の沖積土の上に立地する土地柄であるだけに、畑作を主としたもので、灌漑工事が進んでいなかったため、江戸期以前の稲作は、限られた水がかりのよい土地に限られていた。低地部の畑作は雑穀等とともに洪水のたびに大被害を受けて、不安定な基盤の上に立っていた。たまたま蜂須賀入国により畑作に適している藍作を奨励して領民の疲弊を救済しようとした。藍作とともに当時の主要作物は、麦・甘藷・菜種であった。米作は統制作物となっていたので、他の作物よりも優先的に取り扱われた。武士の封禄米として、その確保がはかられたからである。したがって作付反

別は、新田開発などによって確保され、吉野川洪水による被害を受けつつも、その生産量は第一表に掲げた本町内、各地区の上納米の量をみても明らかに示されているとおりでである。

第一表 文化十年(一八二三) (阿波藩民政資料)

地区	上納米
上浦	682,555 ^石
牛島	1,142,957
麻植塚	248,849
山路	761,477
内原	367,732
中島	201,971
森藤	712,173
喜来	489,891
鴨島	578,988
上下島	381,516
飯尾	878,215
敷地	561,511
西麻植	840,153
知恵島	417,665
計	8,265,653

ロ、明治時代以降の農業

明治時代以降の農業は前代を承けついで、藍作・米麦作が主であり、副業として養蚕が盛んであった。

換金作物としての藍作は、藩政時代に引き続きいて依然盛況を示していたが明治七年以後印度藍が輸入されるようになって、情勢は一変したのである。明治十年(一八七七)には五代友厚が、本町飯尾に製藍工場をつくって藍の改良生産を開始したが、西欧ドイツより化学染料の輸入がはじまって、藍価、生産費において、人造藍や化学染料等の外国輸入染料と競争ができなくなり、明治三〇年代を境にして、遂に衰退の一途をたどり、その代作として養蚕・米作が行なわれるようになった。養蚕は明治二〇年頃から、副業として普及の段階に入ったが、それ以前本町は「くれしま」の伝統があり、養蚕絹糸の面で、阿波国において先進地域であったことは事実である。しかし戦時中は、養蚕の業も等閑にふせられたのであった。

2、藍作の盛衰

イ、藍作の繁栄

江戸時代の鴨島町は、全耕地のほとんどが畑であって、水田はわずかに西

麻植、森藤地区にあったに過ぎない。ただ麻植塚、上下島地区はわずかに点在していた程度である。これはおそらく当時は全く自然水利用であって、南山麓の湿地地帯が水田となったものと考えられる。畑にはほとんど麦・粟・ソバ・トウモロコシ・ヒエ・タカキビなどの雑穀が植えられていたが蜂須賀入国とともに藍作が奨励され、南山麓の畑地を除いて平地には、ほとんど藍が栽培された。阿波の藍作は古い時代から行なわれたといわれている。しかし盛んになったのは、藩主家政公の努力によるものといわれている。家政公は元和のころ、播州から優秀な藍種をとりよせて、慶長・元和(一五九六―一七〇四)頃麻植郡の呉島郷(鴨島町の一部)に試作させたと伝えられている。これが幸にも風土に適してよくできたので阿波北方一円に広がり、特に染料としてその品質がすぐれていたので全国的に「阿波藍」として有名になった。わが鴨島町内にも今も残る高い地盤石・白壁の寢床・大きい母屋に土蔵・白いねり堀をきざまわした城構の旧家と称するものは、ほとんどこの時代の藍師の屋敷である。この独特の農村風景も今は経済状況の変化により、その面影をなくしているのは一抹の淋しさを感じる。

ロ、藍玉の製造

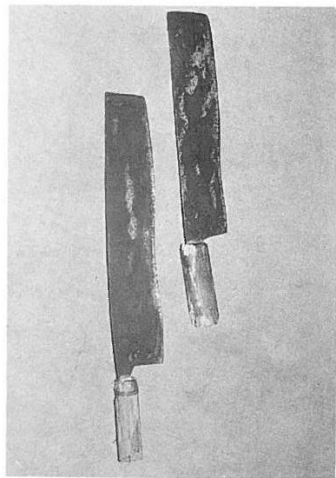
藍はタデ科の植物で藍つくりとは四月頃播種して八月頃葉藍を畑から刈り取り、切断してスクモにする準備を終わるまでの工程をいう。この時大へん忙しく臨時雇いの労働者を



藍 倉

十日から十五日の間位雇い、忙しい時には休憩時間もないくらいで、食事のみ込むようにして食べ、煙草を吸う間もないので便所の中でかくれて吸う。そのため、家によっては便所の戸を取り除く家もあるくらいである。しかし給料はよかった。鴨島あたりでは忙しいことを「アイコナシ」のようなこともいったくらいである。葉藍の刈り取り作業は夕刻からはじめて、それを家に運び、ただちに切断するので深夜午前一時、二時に及ぶこともある。運び込んだ藍は、小束にしてアイキリで切断するが一反歩(一〇アール)の葉藍は男なら一人役、女なら二人役である。刻んだ葉は茎と葉に分ける。その方法

には「カザヤリ」といって一メートルくらいの高さの台の上にあがって小箕こみに入った葉をゆるやかにゆさぶりながら落す方法と、大箕おほみを使って上下にあおる方法ともう一つは、コロバシで茎をおとす方法がある。いずれにしても葉を刈ったその日のうちにせねばならない。こまかく切った葉はその夜はそのままおいて、翌朝から筵むしろに拡げて乾かす。だから藍師の家には広い倉庫と広い外庭が必要である。乾かした葉藍は日光に晒すと葉が少し柔かくなる。それを十一時頃までカラサオ(唐棹)で、縦横にたたき、その間に竹箒で混ぜ返し「アイスリ」でもむ。だいたい乾燥した葉を箕にかけて茎片をのけ日没頃に俵につめる。この段階で葉は出来たので藍師に売り渡す。この作業は激しい作業であるが、刻んだり、カラサオで叩いたりするときは軽い作業だし、おまけに一時的に四方から雇われてきた若い男女の集団であるから活気をきわめ、民謡の温床ともな



藍切り包丁

った。「藍こなし歌」

へ阿波のキタガタ起きあがりこぼし
寝たと思ったら早や起きた。

トヨエー

へ藍の種蒔き生えたら間引き 植え

りゃ水取り土用刈り トヨエー

へ旦那手かけになるなよおなご 灰あ

汁あのたれかすあとすたる。トヨエー

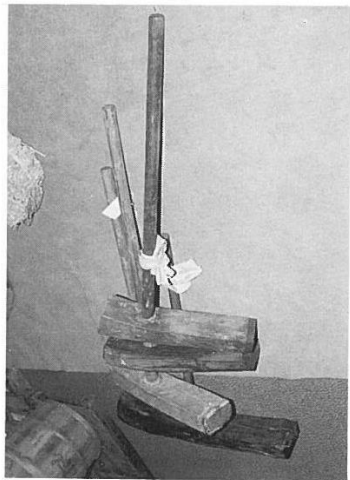
藍こなし歌は、若い娘が手拭で顔をつつみ、二つ折の編笠に紺の手甲のいでたちで若衆に伍して「シヨンガへ」節を歌いながらキキーキキーと笑いながら働いていた様子だと古老が話していた。

(一) ぬしのそばじゃえに、仕事が出来るシヨンガエー

ぬしがおらねばわしややめる。ウウ シヨンガエー

(二) 千両くれても妻持ちや嫌いやよ、妻のうらみがおそろしい シヨンガエー

(三) 阿波の北方起きやがりこぼし、寝たと思えばすぐ起きる。シヨンガエー



藍玉造り杵

(四) 阿波の北方女の夜ばい、男ぬくぬく闇で待つ ショングエー
 大きな声で唄い出して細く引っぱって、仕事に調子を合わせて大きな声で長く落して唄う「ショングエー」と可愛らしい節で切って愉快に働いていたとのことである。

アイコナシの後、筵に残っている粉葉や、塵なども採集し、水洗いしてスクモ(菜)の原料にする。「スクモ」とは葉藍を醗酵はっこうさせて染料として使用できるようにしたものである。スクモの製造家を玉師という。藍師とは玉師と販売人とを兼ねるものをいう。その作業場を寢床(ネトコ)という。藍をネトコに搬入して拵げ、打ち水をむらなく散布し、熊手で何回もかきませ約36〜39cmに積み重ねて上面をならし、周囲をよせ板で押し固めフトンをかけておく。二、三日すると醗酵をはじめ、しだいに温度が上がるが、十日あまり放置して水分が蒸発したところをみて、堆積を崩し四つ手、熊手とハネで何回となくかきまわしこね返して、水をふりかけてもとのとおりにして置くと醗酵を開始するので、五日間放置し、蒸散・冷却・床崩し切り返しの後、水を十分散布して高さ4cmに積み直す。これから五日目ごとに切り返し、

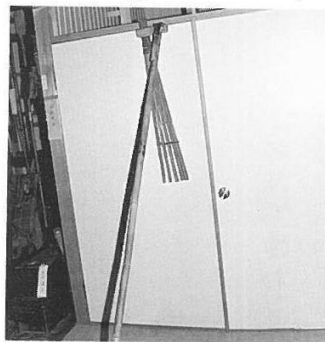
水を打つこと十七回繰り返す。スクモを白でつき固め球状にしたものを藍玉(アイダマ)・玉藍(タマアイ)または玉ともいう。明治初年から方形になった。スクモはそのままでも染料になるが、藩の方針としてスクモノままでは市販を禁止した。藍玉をつくる作業をアイツキといい、その白をツキミウスという松材で口径80cm位、高さ50cm位のものに深さ20cm位の凹をつくりこれに得意先の注文に応じたスクモを入れてつき混ぜる。アイツキの順序を示すと次のようなものである。



藍つきの木臼

- 1 はじめはスリ(摺り)という小杵こきねで二、三度白のまわりをまわりながら、うねいにすってねり合わせる。
- 2 手箒に水を浸した水をふりかける。

- 3 竹の權かでまぜてよくならす。
- 4 水を加え大杵きねの太い方でついて平にする。
- 5 太杵の細い方で約30cmくらいに切り刻む、これを色とりという。
- 6 じよろで水を打ち、杵の太い方でつきつけて平らにする。(水は上級品には打たぬ)以上の操作を数回繰り返して固める。
- 7 つき終わるとウスコスリで白にへばりつけている藍を掻き落とし、最終にキリミズ(切り水)を打つ。



カリサオ

- 8 タマキリガマ(玉切り鎌)方3〜5cmに切り落す。これがアイダマ(藍玉)である。

麦稈製のスダラワ(素俵)に入れウワマキムシロ(上巻筵)で包み、タマシミ(玉墨)で大印小印などの商標を記入し、縄をかけて出荷する。

藍師の藍つき場では、紺の筒袖やももひきにその家の屋号を染めぬいた厚

司(アツシ)の前垂れ、印入りの新しい手拭で鉢巻きをしめてめいめい手慣の杵を持って仕事をす。

アイツキの季節は初冬で製品によって極上品は一日に二日〜五日かかり、中品では一日に一白半、下品では一日に二白くらいである。上品になるほど水を加えないので空白をつくようである。この音を拍子にして、音頭を歌い、村にはかならず音頭の名人がいて、それが棒つき音頭を歌う。アイツキは一節ごとにはやしを入れ、調子のそろった幾十本の杵が上下する動きはみごとであった。

へ春霞、たなびき渡る世の中に 通う千鳥の淡路島

というような音頭の一節ごとに「ヤットサツサ



藍がめ

「エエサツサ」のはやしを入れたものである。

このようにして、藩の奨励により作付面積も多くなり、反当の収穫高も増加して来た。

第二表 麻植郡

(辻)	(上)	(地名)	(辻)	(上)	(地名)
三五貫	四五貫	牛島	三三貫	四五貫	桑村
四五貫	五五貫	麻植塚	三三貫	三〇貫	山崎
四五貫	五五貫	内原	二〇貫	三五貫	瀬詰
三八貫	五〇貫	飯尾	二三貫	三五貫	西川
四〇貫	五五貫	上下島	八貫	二五貫	三ツ島
四〇貫	五五貫	鴨島	〇貫	五貫	山田
三八貫	五〇貫	中島	二三貫	三五貫	東川
三三貫	四五貫	山路	二八貫	三五貫	上浦
三〇貫	四五貫	敷地	一五貫	八貫	川田
三〇貫	四〇貫	川島	一八貫	二二貫	種野
二五貫	三五貫	森藤	一八貫	二五貫	東山
三八貫	五〇貫	西麻植	一五貫	八貫	別枝
二八貫	四〇貫	宮ノ島	一五貫	八貫	析山
三五貫	五〇貫	学村	一五貫	八貫	中村
三五貫	五五貫	児島	一五貫	八貫	中山

前表を見ると、一反歩の収穫は、五貫を最低とし、最高は五五貫に及んでいるが、鴨島町内だけでなしに、藍作地域の全部を記述してみると二表の如くであって、他村との比較によって一層本町の藍収穫状況が明らかに知られる。

かくて阿波藩では、藍の保護統制のために藩主の直轄として寛永二年(一六二五)藍方役所を設け、享保十八年(一七三三)従来併置されていたものを独立官庁として「藍方奉行所」を設けた。阿波以外の所産の藍が出回るのを防止するため移出藍には「明藍証」(阿波藍である証明券)を添付したこの制度は大正時代まで継承された。一方藍製産の肥料として干鰯ほいわの移入も盛んで、享保元年(一八〇一)には、徳島・撫養の両地に干鰯問屋九軒を公認して、その資金融通等の事を始められた。肥料の干鰯は文久の頃になって鯀粕にかわったが、移入港は同様これらの港に積入れられた肥料は、陸上げされて麻植郡をはじめ、藍の栽培地方に送られ、その肥料によって出来た藍はこれらの港に集められ、そこから他国へ積出された。天保二年(一八三一)

の頃における伊予売の売場株は盛んであった。売場はほぼ日本全国に及んだが、特に著しいのは「関東売」と「大阪売」でそれぞれの土地に藍玉問屋・藍問屋ができた。しかし、これも時代の推移とともに外藍や印度藍におされて、だんだん衰退していった。

阿波藍回生の各界の努力にもかかわらず、外藍特に印度藍がカルカッタ港より盛んに輸出せられ、わが国に輸入したものは明治十九年には六万斤、同二十年には八万斤となり、二十一年には二十八万斤と増大した。この形勢は二十五年には一躍四十万斤、三十年には一二〇万斤と増加を示し、それに反して、明治三十五年以降になると、より低廉なドイツ人造染料が輸入せられるようになって決定的打撃を受け、本町においても累代の藍作を廃して養蚕に切りかえるものも現われ、加うるに明治末年における「麻名用水」の建設は、米作りをするようになり、特に太平洋戦争中における「食糧増産」は国策とされ、三百年の伝統を持つかがやかしい栄光に満ちた藍作もその姿を消すようになった。

次記に示す統計によると「麻植郡」における藍作反別も衰退の一途をたどり、昭和十四年からは記載からはずれ、昭和三十二年度には僅か十五町歩に止まった。

第三表 麻植郡藍作反別表(徳島県統計書)

一、六二四町	明治25年	一、六四七町	明治30年	一、六五一町	明治35年	一、二〇五町	明治40年	三七〇町	明治45年	七五八町	五三八町	五丁	昭和5年	三町七反	昭和7年	一五町	昭和32年
--------	-------	--------	-------	--------	-------	--------	-------	------	-------	------	------	----	------	------	------	-----	-------

第三表によれば、大正五年に僅かに増加がみられるのは、第一次世界大戦中で染料が世界的に不足した一時的現象である。

明治・大正時代、本町における阿波藍商同業組合の役員は次の通りである。

組合長	川真田 徳三郎	地方検査役	工 藤 増五郎
副組合長	工 藤 半 平		多 田 与三郎
評議員	川真田 市兵衛	代議員	日 野 勢 平
地方検査役	庄 野 一		川真田 徳三郎
	大 串 甚 助		庄 野 一
	川真田 鹿太郎		岡 田 儀 蔵

(5) 麻名用水

明治三十五年(一九〇二年)ごろをピークとした阿波藍が、ドイツの化学染料インジゴにおされて、次第に養蚕に切り替える農家がふえていった。つづいて化繊の発達から絹織物の不振をきたし養蚕業が確実性に乏しくなり、桑園減反後の畑地の有効利用を求めて米作の要望が高まり、用水路を開設する水利計画が立てられ、明治三十二年(一八九九年)麻植・名西両郡長が発起人となり、両郡十三町村による組合の創設を見、さらに明治三十七年(一九〇四年)に大干害があつたので、その促進が強く望まれた。いろいろと案がねられたが、結局川島町の城



麻名用水

山の下から疎水(そすい)をすることとなり、明治三十九年(一九〇六年)十二月一日、起工し、明治四十五年(一九一二年)三月、足かけ七年の歳月を費して完成し、千二百五十四町歩余りの水田を灌漑(かんがい)することが出来るようになったのである。当時の金にして総経費計四十四万六千円余りを要した大事業であつた。

第二節 産業 経 済

現鴨島町は、他町村に比較して土地が肥沃(ひよよく)であつたので藍の反当生産高が高く、また、それを原料とした藍玉(あいたま)の製造という組合せによつて、次第に富を蓄積(たくせき)した人たちが多く出た。しかし、明治三十四、五年(一九〇一、一九〇二年)がピークで、ドイツの化学染料(せんりょう)におされて次第に下降線(かこうせん)をたどり、農家の多くは養蚕業(ようさん)に転換(てんかん)し、大正時代から昭和初期にかけて、その最盛期

となった。

この時期に藍商たちの蓄積された資金は、数多くの製糸工場の建設や蚕種製造に転用されて、現在の大鴨島町発展の夜明けを迎え、商店街が発達して農村から阿北の中心商業都市へと急激に変貌していった。

また、この鴨島町の藍商や蚕種業者の蓄積資本が、阿波と阪神との海上交通のパイプである阿波国共同汽船株式会社の創設や、現在の国鉄徳島本線の前身である徳島鉄道株式会社の建設、呉郷文庫の開設など、県の交通、経済、文化面の発展に大いに貢献した。

大正八年(一九一九年)には、県蚕業試験場が徳島市から鴨島町に移されたことよって、本町が県下の養蚕業、製糸業界の中心地となった。

近年は、工業団地を牛島地域に造成して、工場誘致につとめている。昭和五十九年(一九八四年)には大和真空工業所をはじめ、先端企業五社が進出してきて内陸工場地帯として力強く歩みだしている。

1、藍 作



よく育った藍

阿波藍は、藩制時代から日本全国の市場を独占していたので、吉野川沿岸の平地はもちろん山間部まで藍作がなされていた。特に現鴨島町地域は地味が藍作に適している上に、堤防が未完成の時代では洪水のたびに肥沃な土砂を運んできたので、藍住町などとともに県下でも最優秀品の産地となっていた。

阿波藍の競争相手である外国藍、主として印度藍の輸入は幕末ごろから少しずつ行われたが、

明治元年(一八六八年)には六千六百斤(三千九百六十キログラム)、同五年(一八七二年)には五万七千斤(三万四千二百キログラム)と次第に増加した。

しかし、明治四年(一八七一年) 廢藩置県とともに藍の統制がとかれ、製造販売が自由になり、粗製乱売が始まった。

阿波国の売場株の開放とともに、岡山・広島・愛知・埼玉の諸県も阿波国から教師を招いて製藍法の研究を始め、次第に生産が増加した。輸入藍の漸増と他県の製産増加によって、競争が次第に激化して、阿波藍も危急存亡の時期に追いこまれる状態になった。

県としてもこれの対策に頭をいためた結果、製藍の改良事業、運賃の軽減策として阿波国共同汽船会社の設立、肥料の合理化などに力を入れたが大した効果もなく、また一方では、輸入藍が明治二十年(一八八七年)には四万



藍こなし(上田利夫著、阿波藍民俗史より)

八千キログラム、二十一年(一八八八年)には十六万八千キログラム、三十年(一八九七年)には、七十二万キログラムと急増し、三十五年(一九〇二年)以降になると安価なドイツ染料が阿波藍を圧倒してきたのである。

藍の値段が次第に下がり収入が少なくなると、藍作農家は比較的收入の多い養蚕に転換を余儀なくされていったのであるが、一方では米作への転換の声も出て麻名用水の早期開設へと進展していった。

なお明治十九年(一八八六年)九月の阿波藍商繁栄見立鏡には東西合わせで四百余りの業者が名を列ねており、その中に現鴨島町関係では二十余業者の名が出ている。

また明治二十九年(一八九六年)十月の徳島県藍商繁栄見立一覧表も併せて次ページに紹介してみよう。

なお現在でも町内には藍寢床のある家が数多く残っていて当時の藍製造の盛大であった歴史の跡をとどめている。

明治十九年九月の阿波藍商繁栄栄見立鏡

大南	西野	保太郎	二	大南	西野	保太郎	二
川田	吉五郎	松浦	次郎	川田	吉五郎	松浦	次郎
志摩	重太郎	吉田	文三郎	志摩	重太郎	吉田	文三郎
藤田	保次郎	藤田	保次郎	藤田	保次郎	藤田	保次郎
若槻	直太郎	若槻	直太郎	若槻	直太郎	若槻	直太郎
井上	嘉次郎	井上	嘉次郎	井上	嘉次郎	井上	嘉次郎
佐藤	源太郎	佐藤	源太郎	佐藤	源太郎	佐藤	源太郎
多田	勇吉	多田	勇吉	多田	勇吉	多田	勇吉
豊田	一平	豊田	一平	豊田	一平	豊田	一平
大串	次郎	大串	次郎	大串	次郎	大串	次郎
後藤	真之助	後藤	真之助	後藤	真之助	後藤	真之助
奥村	嘉藏	奥村	嘉藏	奥村	嘉藏	奥村	嘉藏
木内	兵衛	木内	兵衛	木内	兵衛	木内	兵衛
松浦	三郎	松浦	三郎	松浦	三郎	松浦	三郎

繁栄栄見立鏡

大南	西野	保太郎	二	大南	西野	保太郎	二
川田	吉五郎	松浦	次郎	川田	吉五郎	松浦	次郎
志摩	重太郎	吉田	文三郎	志摩	重太郎	吉田	文三郎
藤田	保次郎	藤田	保次郎	藤田	保次郎	藤田	保次郎
若槻	直太郎	若槻	直太郎	若槻	直太郎	若槻	直太郎
井上	嘉次郎	井上	嘉次郎	井上	嘉次郎	井上	嘉次郎
佐藤	源太郎	佐藤	源太郎	佐藤	源太郎	佐藤	源太郎
多田	勇吉	多田	勇吉	多田	勇吉	多田	勇吉
豊田	一平	豊田	一平	豊田	一平	豊田	一平
大串	次郎	大串	次郎	大串	次郎	大串	次郎
後藤	真之助	後藤	真之助	後藤	真之助	後藤	真之助
奥村	嘉藏	奥村	嘉藏	奥村	嘉藏	奥村	嘉藏
木内	兵衛	木内	兵衛	木内	兵衛	木内	兵衛
松浦	三郎	松浦	三郎	松浦	三郎	松浦	三郎

明治二十九年十月の徳島県監商繁栄見立一覽表

徳島縣 藍

Table listing blue production statistics for various districts in Tokushima Prefecture, including names like 吉野川市, 徳島市, and 小豆郡.

商繁栄見立一覽表

Main table listing blue production statistics for various districts in Tokushima Prefecture, including names like 吉野川市, 徳島市, and 小豆郡.

6、国会議員 川真田市兵衛

天保十三年(一八四二年)鴨島の藍商の家に生まれる。衰退期にあった藍の復興に尽力、優秀な藍の生産に努め阿波藍の声価を高めた。

また明治五年(一八七二年)川島から喜来までの江川南岸堤防を築くことを企画し、東奔西走同志を集めてついに完成し、洪水の災害から地域を救ったのである。

また、阿波国共同汽船株式会社を設立して社長となり、また電燈会社を起すなど、社会の進歩に貢献するとともに政界でも活躍した。

7、国会議員 川真田徳三郎

万延元年(一八六〇年)鴨島の製藍業者の家に生まれた。前掲川真田市兵衛とともに、阿波藍の品質改良と販路の拡張につとめるかたわら、阿波国共同汽船株式会社の創立に努力して、阿波藍の運送費の節約につとめるとともに、陸上交通の開発を企図し、明治三十三年(一九〇〇年)八月、徳島一舟戸間の鉄道開通に尽力し、後、会社の社長となり、また、政界でも活躍した。

8、国会議員 須見千次郎

弘化三年(一八四六年)美馬郡に生まれたが、敷地の須見徳平の養子となった。後、阿波紡績監査役、徳島毎日新聞監査役、八十九銀行取締役社長などに就任、国会議員として政界でも活躍するかたわら、商工業の発展に努め、また、家業の製藍業を継続するとともに、阿波藍の改良に努めた。

12、呉郷文庫 石原六郎

明治六年(一八七三年)飯尾に生まれた。家業を継ぎ藍の製造にはげんだが、後明治三十六年(一九〇三年)ドイツ人ボトルと特約し、人造藍を輸入し、大同藍株式会社を設立して全国に販売した。商才にたけた人ではあるが、

阿波人であって阿波藍に対抗したのである。

大正四年(一九一五年)、郷土史書を集めて飯尾に「呉郷文庫」を作り、一般に開放したり、「呉郷育英社」を作って高等学校及び大学の秀才学生の学資を給与したりして英才教育に努めた。

17、実業家 工藤鷹助

西麻植の人、家業の製藍業から、いち早く蚕種製造にふみ切り、大正末期には従業員四百人余をかかえ、工藤館といえは県下では誰知らぬ者もない程の大会社であった。蚕種の製造高も全国で十位以内といわれている。

また私費を投じて江川遊園地を建設、県民の憩いの場として提供した功績は、全国でも珍らしいことである。

9. 村の金作の藍作

(1) 藍は初め漢土から移植せられたものか？ 昔神功皇后征韓の時、飾磨の唐津で藤鹿が褐染草（藍）で御幡を染めたことがある。村上天皇の時の記録に阿波藍は最もすぐれていたという。天文十年、上よりあをや、四郎兵衛が来て、藍染を知った者がなかつたので、殊の外仕合わせよく暮したという。小笠原家系譜の中に安之丞は寛文年中に播磨か

ら藍種三合を持ち歸つて播種したことを記しているが、これが阿波の藍作の始めであるともいう。

元和年間に蜂須賀家政（蓬庵）が播磨から蓼藍の種子を移し、麻植郡の呉島に試植せしめ、一時衰えた藍作を奨励し、改良を施して民業を興し、阿波の北方は一面藍玉の産地として、全日本に豪華を誇つた。

他国に輸出するようになって、藩は役場を創設して僅少の税金を徴して居たが、隆盛期には玉染一年間十五万俵から二十万俵に上つた。一俵に付四匁三分、外に行著銀、一張に付一匁八分七厘八毛を収めた。一カ年平均産額十七万俵と定め、これに相当する税金を徴し、余分は役場に貯蔵して不慮の費に備えた。慶長年間に、一俵につき銀二匁を増収し、享保年間に江戸十組問屋と定めて藍玉の売捌きをさせ、また大阪に七名の問屋を許して藍売支配人と唱え、七名以外の他者には販売を許さなかつた。もしこれ等のものが各地方の藍に関係すれば、罪の軽重によつて処断したという。なお他国の売場の人員も、その数を限り、濫売をさけたので、その商人・製造人は明和年間には一千二百余名あつたという。

(2) 藍作之事（阿波藩民政資料）

天文五年七月十日「御口中藍作見分有之村々貫目之次第」の内、阿波郡十六村の分を抄録する。

- | | | | | | | |
|----------------------|------|------|---|----|-------|-------|
| 知恵島 | 辻二〇貫 | 上 | 同 | 柿原 | 辻十八貫 | 上二十四貫 |
| 伊月 | 辻十八貫 | 下三〇貫 | | 栗島 | 辻二十二貫 | 上三十五貫 |
| (3) 宝暦八年以来凡そ七、八年間の値段 | | | | | | |

1. 五条―七条―知恵島 一貫四、五〇〇―四ツ屋悪し 2. 藤大夫塚、宮島栗島 一貫六、七百

3. 柿原 一貫六、七百 4. 鴨島 一貫三百 往還より北悪し

5. 知恵島藤大夫塚、宮島 平一貫七、八百替 6. 柿原、栗島 平二貫

7. 川島、川田迄 平二貫四百

(4) 知恵島村七郎右衛門と問答

問、藍作は盛衰廻り物之趣申者有之

答、古老共右様申伝候、既麻植方角値段段宜布候所七、八年以来藍薄値段一貫式、参より四、五百と下申候

上藍作大低反に五拾貫程六拾貫毛も有之候様にも相伝へ候

(5) 藍作肥造用(宝暦年間)

1. 関東干鰯今年一俵銀三拾二匁かへ

上作人は一反に六七俵程今年にては上と申も四五俵程上中小作人下糞代銀百目其余諸造用三十目一五十目程

2. 上藍は大低反に五十貫六十貫も有之様聞及候

(6) 知恵島辺に而二町作り候者

凡三十貫平し程二町に平四十五貫毛と申に付逢不申由上五〇貫中三拾五貫下式拾五貫知恵島村七郎右衛門藍作二町

売立つ所銀三貫五、六百目程肥造用七、八拾目程

(7) 一、村に平候へば上所上藍は四分通にも当り可申由

一、きらり・こうしやう此虫は藍毒

一、にらむしは黒み懸て宜好み申事に候

一、留糞は土用の前二〇―二二日を置

一葉藍一の替之時は玉二貫地売七、八百を売不申候、なほ引当に合不申候、大阪売は六百位上は一貫一式貫位平一貫一五百位 一、りん葉と申は一の替に而も木葉は一貫六、七百替に候はん 拾俵に付半分切木葉廿三俵程、輪葉と申は藍の積四寸計切五は大反にて四百程 一、上玉は一白に砂五六合合すと藍五貫目無垢藍と申仕立凡そ砂一白に一升二、三合より二升迄入砂少く王宜布と申付難仕立ものに候砂入れ候に而藍やけ不申関東西国迄も海陸幾百里に而其上に日数を籠申事も痛無之候藍二〇貫、葉元銀二百目巻立一俵二十二貫大阪にて拾貫六百の正味四百五十替式百三拾八匁にして金一步より二拾目位利一刈旬は土用に懸て作人の見込次第旬をいたし候穀物

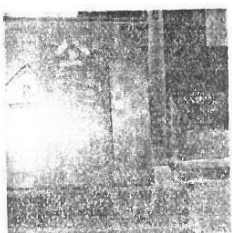
之熟し候荷とは違有之由(享保十二年未六月廿八日) (阿波藩民政資料による)

8. 藍こなし(藍玉)へ

知恵島は、吉野川の氾濫のため、肥沃な泥土が洪水毎に推積したので特に藍作がよく繁茂した。旧暦のお大師さんの頃に苗床を作る。藍苗が長じて四〜五寸になった頃これを畑に移植し、七月腰までの高さ

に生長した藍を、鎌でかり取り、まな板の上に乗せて「なた」という刃物で一センチにする。それは百姓が庭で薄暗いランプの光りをたよりに夏の夜なべ仕事である。朝早くから烈々たる太陽にその刻葉を乾かし、竹で作った「からさき」で打ちたくくと緑色の葉は、やがて黒ずんだ色に変わる。風やりや箕で茎と葉をさびわけ、茎は捨て、葉藍のみにする。かくて、切り株から第二番の芽が出るのを二番藍また二番という、二番の製造も一番と同じである。

さて葉藍を寝床に集め、これに水を加えて再三再四切り返し、「寝返りをやる。この技術者を藍の水師という。このようにして葉に製造し、この葉を松材で直径二、三尺もある丸臼に入れて搗き上げる。この製品を藍玉と呼び延て荷返りをしその表に製造もとの印をつけて諸方へ積出すのである。なほ享保十五年大守宗貞意を産業奨励に致してから阿波藍は阿波唯一の特産物となり阿波藍商人は全国に涉りてその名を高めた。



藍玉の表彰板

9. 藍商人 七条甚十郎(伊予売明治初〜二〇年頃) 大島 吉蔵 伊予
七条精太郎 日向・大隅・薩摩 明三五〜四五五年 井後 吉郎 鹿児島
手東平三郎 大阪 鹿児島 笠井市太郎 大阪 片岡多三郎 大阪
堀江 荒藏 播州 笠井 恒資 播州・丹波 大島菊太郎 伊予売
藩主蜂須賀家政は、入国以来阿波藍の開発を志し、藍師には脇差一本を許して行商するまでに発表させ、国産藍の培養を奨励した。

10 藍騒動 宝暦六年十一月、阿波の北方七郡の百姓等は、藍作農民および藍商人に対する課税の重圧に堪えずして一揆を企て、城下に押寄せ騒擾を醸した。それが発覚して主謀者高原村の山口吉左衛門、京右衛門等五名は鮎喰川

原で死刑に所せられたが、そのために増税の事は止んだので、七郡の農民は五人を義民と称して、高原村に五社明神を建て、祀つた。その後、天保十三年二月、美馬、阿波、麻植三郡の百姓一揆を企てたが、尾開村の原土四宮某の鎮撫で大事に至らなかつた。その関係者若干名は、追放あるいは斬罪になつた。

II 最近の復興熱 その後藍は、始めインジゴ・ピユアに、後には化学染料に押されて没落してしまつた。全盛時期の明治三十年代には、栽培面積は県下で一万五千町歩、知恵島はほとんど全村に栽培せられた。ところが昭和二十年頃には県下でわずかに五町八反で、ほとんど皆無に近い有様であつたが、近時民芸復興熱によつて、洗えば洗うほど色かさえてくる特性が大変喜ばれるようになった。従つて反別も昭和二十七年頃から次第に増加して、約一町余りも栽培して相当の利潤をあげている。それで藍の供給先には、愛媛県の伊予がすり用として中級藍二千五百俵、広島県の備後がすりデニム用として千八百俵、福岡県の久留米がすり用として七百俵、鹿児島大島がすり用として三百俵愛知県の糸染用、千葉県の木綿織用、その他静岡、鳥取、宮城、茨城の木綿織用または手織糸用などが挙げられている。特に奄美大島、久留米、鹿児島、関東地方に移出されている。昔、阿波藍を使つて名声を博した江戸川長板染、結城紬、久留米紬、伊予紬が今や国の重要文化財の指定をうけるに及んで、筑後や備後の藍を引離して質の良さを誇つている。

藍に化学肥料を施さないで、練粕や大豆粕をやつてほしい、そうでないと藍染めの本当の味が出ない等積極的に品質向上をはかっている人もあれば、また徳島から藍をわざわざ取り寄せて自宅で藍染を織る人も出て来たという話である。藍の良さは、木綿を藍で染めると、生地が強くなる(実験上)し、滋賀県の農家では藍染の野良着でないという話がないという風習がいまだに残っている。また藍染の野良着を着ていると毒蛇が寄りつかぬ(文献)ともいう。ともかく民芸品として進出したのは、合成染料がケバ／＼しいのに反し、藍染は落着いた色合いを出すからで、将来頼母しとい、藍作家北川宇太郎氏は叫んでいる。

12 藍こなし歌 藍作全盛の当時、若い娘が手拭で顔をつまみ、二つ折の編笠に紺の手甲のいでたちで、若衆に伍して「シヨンガへ」節でキャツ／＼と笑いつゝ、坊く様が目に浮ぶ。

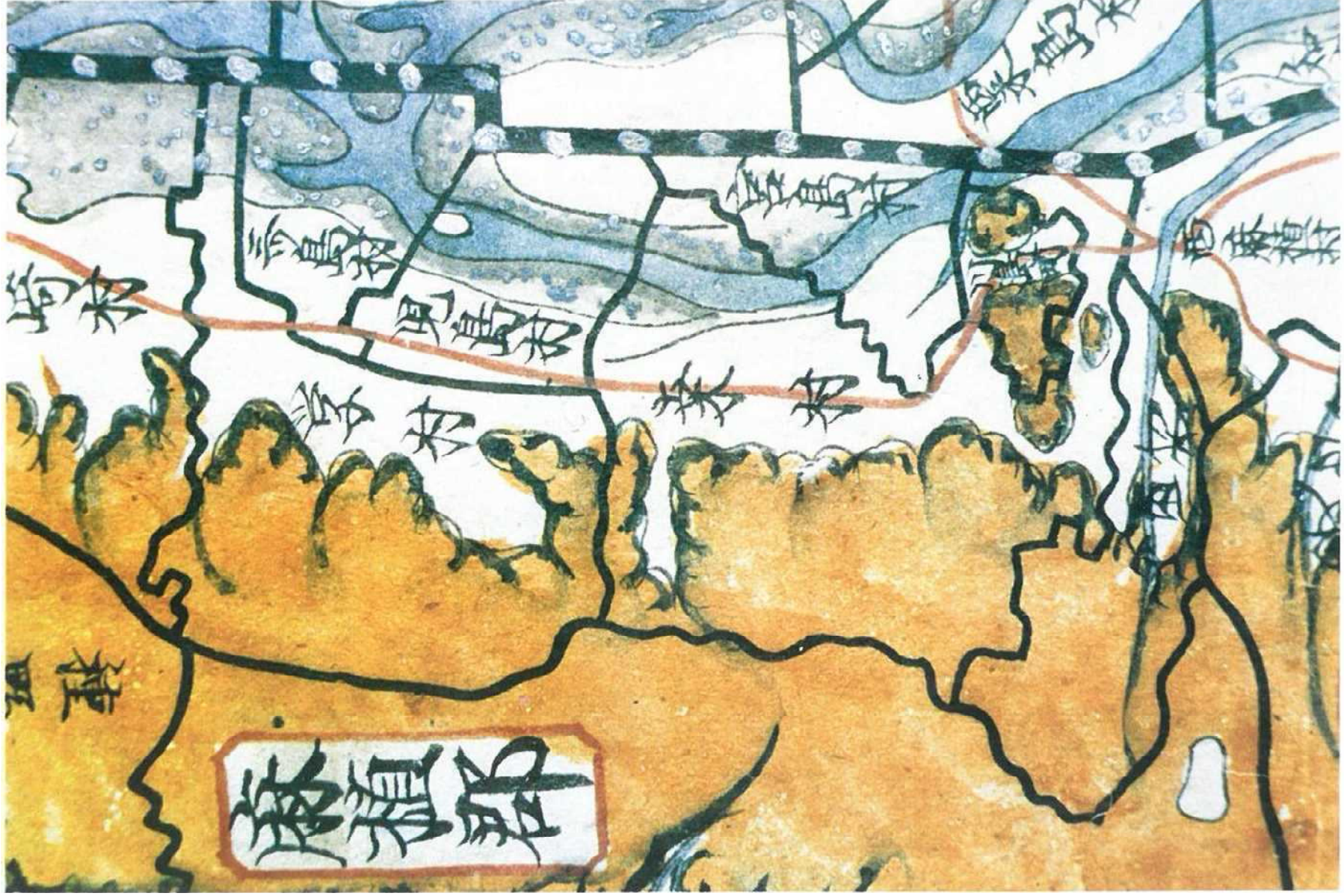
ぬしのそばじやけに 仕事が出来る シヨンガエー ぬしが居らねばわしや止める ウウ シヨンガエー
阿波の殿さん 文七独楽と 加島主水に 廻はされる さぬき商人が阿波へ来りや 旅じや情で置く阿波の女郎
千両くれても妻もちや嫌よ 妻の思いがおそろしい シヨンガエー
さんざ時雨か菅屋の雨が 音もせて来て濡れかゝる シヨンガエー
武蔵あぶみに紫手綱乗せて やりたや何国まで シヨンガエー
阿波の北方起きやがりこぶし 寝たと思へばすぐ起きる シヨンガエー
阿波の北方女の夜ばい 男ぬくぬく間で待つ シヨンガエー

大きな声で唄い出して細く引つぱつて、仕事に調子を合わせてまた大きな声で長く落しうたつた。
シヨンガエーと可愛らしい節で切つて、快活に働く。

13 養蚕 (1) 私達の生活収入の金作りは藍作であつたが、外国藍の侵入で藍作では生活が出来なくなつたので、その代りとして選ばれたのが養蚕であつた。たしか明治三十七、八年戦役後だと思ふ。笠井武平・七条精太郎の両氏が、埼玉県の大宮や浦和へ出向いて、桑苗を共同購入して移植したのが我が村の桑園栽培の嚆矢と思ふ。年毎に増植せられ、また／＼間に全村桑樹に覆われてしまつた。大きくいえば麦畑かなくなつた程といつてよからう。

蚕紙の掃立数も、桑園の増植に比例して増大し、五十枚を掃立てる農家が数軒も出来る始末で、また／＼間に阿波郡はおるか県下有数の養蚕村にのしあがつてしまつた。

(2) 加うるに、桑苗の需要が増したことから、西知恵島の石川・河野両氏は率先して桑苗業を初め、一傍示ほとんど同業に従事し、本県は勿論、四国四県を制覇する盛況を呈した。それで今なお斯業に従事する者もある。

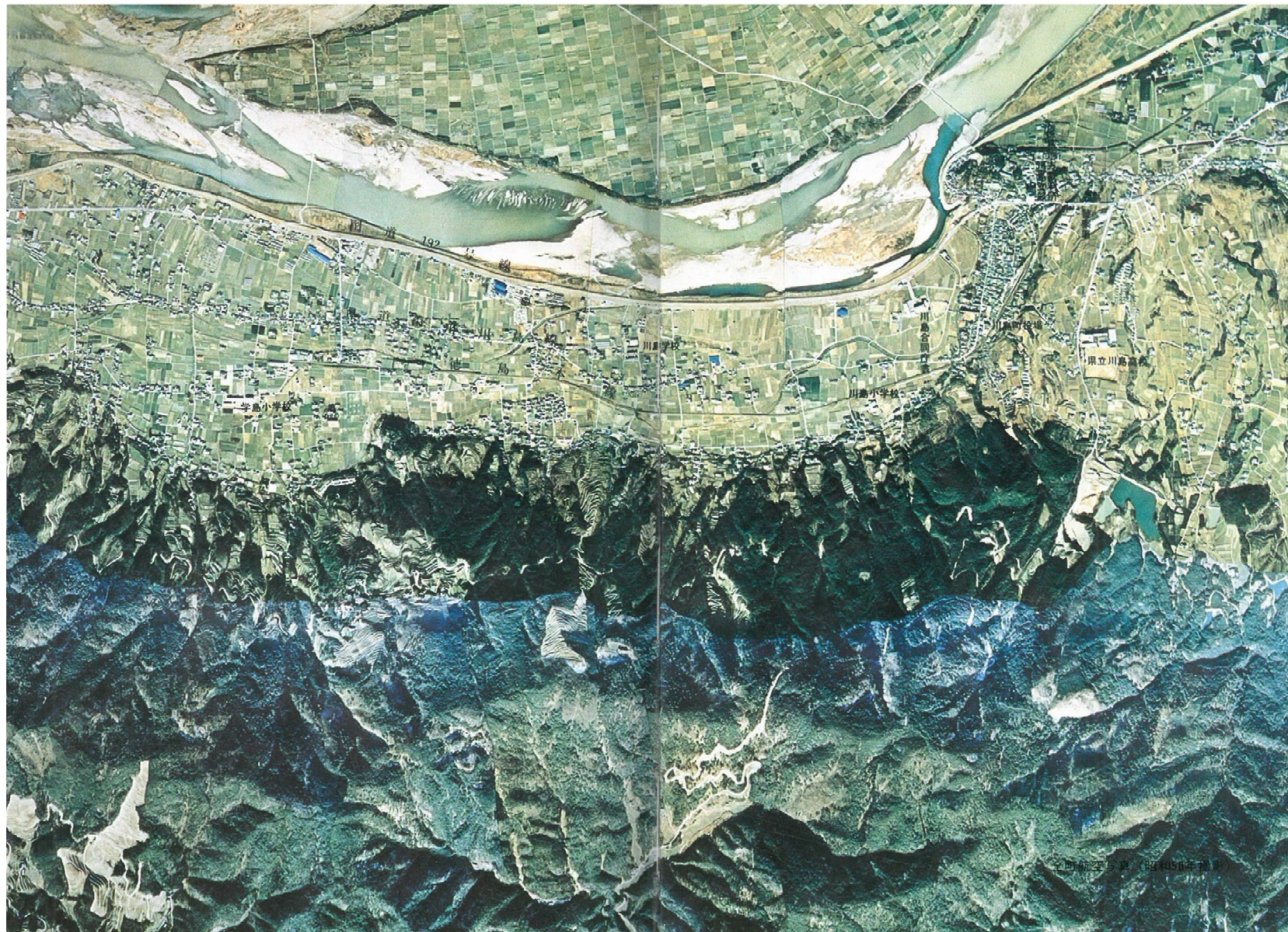


文化10年の麻植郡地図より
(中 美智子蔵)

吉野川市(旧町村)発行歴史書 藍に関する記述

江戸時代(文化10年【1813】)時点で川島は村ではなく町であった

川島町史上巻 巻頭 昭和54年3月31日 川島町発行



川島町航空写真 昭和50年撮影

川島町史上巻 巻頭 昭和54年3月31日 川島町発行

一一 農業の発達と郷町川島ごうまち

幕府や藩の奨励と農民の勤勉努力によって、年貢増徴が主目的とはいいながら、一面農民の収入増加も見込まれて、新田島の開発、用水の利用、また前記の例が示すように溜池用水の開発、害獣への防禦施設等々がしだい

に進められていって、農業は著しく進展した。ことに干鰯しほが、油かすなど高級肥料の利用、米麦の新品種の発見や、備中鍬・千齒こきなど新しい農器具の発明普及は、増収に拍車をかけた。

それでも農民は貧しかった。ことに貧農と富農の差は著しかった。農民にとって必要欠ぐべからざる農耕用の牛馬さえ、全部の農家が所有していたわけではなかったらしい。実力つづく一家か、あるいは小家であっても資力あるものでなければ、牛馬の飼育も行っていなかったようである。

文化四年の学村棟付改帳によると、総家数二九九軒、そのうち市中や他郷への稼ぎ人、借宅加宿人二七軒を除いても二七二軒のうち、馬八三匹、牛同じく八三匹、合計一六六匹が飼育されているにすぎない。また文化三年桑村棟付改帳をみても、総家数二八九軒、そのうち市中他郷稼ぎならびに借宅加宿人三四軒を除いた二五五軒のうち、馬八四匹、牛一六匹、合計一〇〇匹が飼養されているにすぎない。地主の農地を耕作するだけの小作人で、牛馬も農器具も地主所有のものを使用する日傭いのごとき農民もあったことであろうが、農耕に必須不可欠の牛馬を所有飼育できない農家もあったことは事実である。

貧農と富農との隔差は、自給自足を建て前とする米経済から、農産物を商品として貨幣と交換する貨幣経済に移行するにつれて、ますますはなはだしくなるのは当然であろう。新しい農器具、よく効く金肥を購入するにも、貨幣を要するからである。

幕府や藩は、年貢の増徴安定をはかるため、積極的に農業を奨励する施策を講ずる半面、農民が勝手に職業を変えたり、土地を棄て、他郷へ奔ったり、農村に商人職人の居住を禁じたり、米麦作雑穀以外の農作物の栽培を制限したりなど、消極的ではあるが、農民規制の方法を施策し、封建社会の安定をはかってきたのであるが、時

代の推移につれてこうした施策はもはや通用しなくなった。

農民も生活の向上につれて、自給自足の農業でのみ満足しなくなったのみならず、生活できなくなってきたのである。農閑期に市中他郷に稼ぎに出たり、米麦以外の商品作物の栽培で貨幣と交換することを希望する半面、日用雑貨・衣料品さては農器具・生活用品の購入に、社寺の縁日祭礼の商いや行商人をまつことに満足できなくなってきた。

近世も後半になると、村々でも二、三日の日用雑貨を売る小店が出現しはじめ、藩政当局もこれを黙認するようになったのであるが、私たちの郷土川島では、すでに郷町川島が成立していて、ここに店を構える商人職人があつたと見えて、早くから郷町川島の名が見えており、近郊近在の人々の需用に応えていたものである。

郷町川島は、伊予街道に面し、吉野川を上下する舟の大きな寄航地として、陸上・河川の両交通の要地であり、かつまた阿波九城の一つであった川島城の城下町を形成し、その廃城後も余韻なお残り、その上大日寺の名刹の所在するあり、かたがた郷町を形成するには恰好の条件を備えていて、対岸のこれまた阿波九城の一つであった脇町と共に、阿波北方の郷町として、川島は近郊近在の需用に応え得たのでないかと思われる。

それでは、その形態、規模、性格などはどうであったであろうか。大きな郷町とは、とうてい考えられないが、それを説明するに足る史料は見出し得なかった。ただ僅かにその片りんを知る資料として「阿陽旧跡記」(慶応四年頃の刊)に「天正十三年家政公は番城を構え、家老林道感を城番として差し置き玉ふ、川島村を其己来川島町と唱へ、尤御免許也」と川島郷町の源流を説明しているが、この資料は年代も慶応四年であり説明文にすぎないので、郷町として実態はわからない。また大正五年三月に、川島与頭庄屋板東仁佐衛門系譜の写し(再

写)に「家政公天正十四年正月三日阿波守ニ任シ從五位下ニ叙ス……是時河島村ヲ川島町ト改ム(河島ト専ラ書クモ旧ク川島郷アルニ因リ河ヲ捨テ川ト一定ス」とあり、阿陽旧跡記を裏書きする文面であるが、これまた後代のものにすぎない。しかし、その頃から川島町として郷町の性格を有して発展したものであろうと思われるが、詳細な事実の考証は後日の探索と考察をまつより他ない。

三二 藍作農民と藍師藍商

自給自足を建て前とする米経済から、商品作物を交換する貨幣経済に移行すると、農民も米麦雑穀以外の貨幣に交換し得る商品作物を栽培するようになる。藩もまた年貢納入に支障を来さないかぎりにおいて、こうした作物の栽培を許可したのみならず、かえって奨励することもあり。これより生ずる大きな収入に課税したのである。米経済から貨幣経済へ——世の中の推移であり、変化である。一部の地域に、麻・綿花・菜種・葉藍・茶・たばこ葉・砂糖きびなどの商品作物が栽培せられ、特産物化した観あったのはこうした背景による。

阿波ではこうした商品作物として綿・養蚕の他に、藍・たばこ・砂糖の生産が知られているが、ことに藍は、阿波の藍か、藍の阿波かといわれたほど発展し、近世後期には全国を圧する藍の生産地として、その名をほしままにしたこと周知のごとくである。

川島の土地は、こうした藍生産の中心地であった。蜂須賀家政は、吉野川流域の豊饒な畠作に目をつけ、前任

地の播磨国龍野の頃から注目していた飾磨産の優秀な藍を取り寄せて、麻植郡呉島に植え、藍栽培を奨励したことが、阿波藍の隆昌を来したはじまりであるとする説が唱えられ、阿波志にも「国初播磨筋より之を呉島に移し植える」(原文は漢文)と記されているが、おそらく成功した事業は、すべて権力者に帰せしめ英雄視せんとする封建社会の仮託であって、そうした事実はなく、信用できない伝承と考えられるが、こうした伝承が生じたほど、呉島の地は阿波藍の生産地の一つであったと考えてよいであろう。その呉島の地については、麻植郡上下島村字呉島(現在の鴨島町)ともいわれ、また私たちの郷土児島村呉島ともいわれているが、はっきりしない。いずれの地としても、麻植郡の川島や鴨島一帯が、藍作の隆昌地であったことを物語るものとみてもよいであろう。

私たちの郷土川島は、優良な藍を生産する土地となっていて、藍師も出で、藍商さえ生まれたのであった。それは近世後期から大正期までつづいたようである。

藍作は、二月節分前後、苗床に種を蒔き、その後畠に移植、肥料を施し、水を与え、害虫を除く作業をくりかえし、七、八十日経過して刈り取る。刈り取った藍草は、細く刻んで日に乾かし、唐棹からさむでたたき、藍摺あじでもみ、俵につめる。俵につめたものが葉藍であって、葉藍は藍師に売られる。これまでが農民の労作で、八月炎熱の候一気にやりとげなければならぬ苦汗の作業である。

こうした苦汗の作業であるが、米麦作に比べると有利であつたらしい。しかし、栽培面積は、藩の規制で制限されていて、藍作は干鰯のような高価な金肥を必要とする作物であり、金肥購入には自己資金のみでは不足がちで、藍師に借金しなければならず、借金した場合は、その藍師に対して借金の利子と共に葉藍を売ることが条



藍のすくも 一岡本一良氏提供一

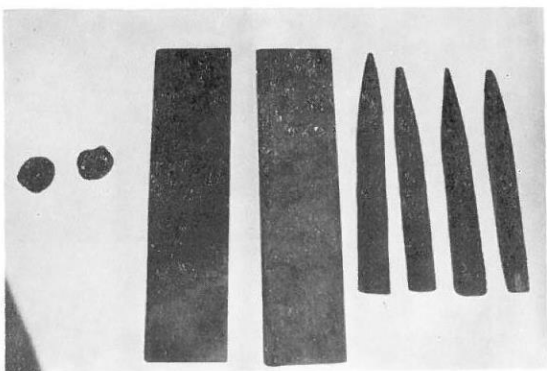
件であるのが普通であつて、あれこれ考えると藍作農民の利益はそれほどではなかったらしい。

むしろ利益を得たのは藍師でなかったか。藍師は、葉藍を買い入れて藍寝床に積み重ね、水をかけ、こねまわして醗酵蒸発させる作業をくりかえし、いわゆる染すくもをつくる。そして、この染を臼でつき固め、塊状に切るといわゆる藍玉ができる。この作業も苦汗の作業であり、高度の技術を要するのであるが、藍師は、金肥の資金を貸しつけた藍作農民から利子とともに葉藍を安く買い入れたり、技術を要する作業だけに立派な製品を生産すれば、その利益は大きかったと思われる。

藍玉は藍師が勝手に売却することは、藩の禁ずるところで、藩の監督の下にある徳島の藍市に出荷して売らねばならぬ。私たちの郷土川島の藍師は、川島の浜から舟に積み、吉野川を下って、徳島の藍市に運んだのである。川島の浜が、吉野川の河港として栄えたのには、こうした藍の出荷が大きく原因する。

徳島の藍市では、出荷された藍玉を、藩の役人立会の下に、目利役が手板法ていたばと称する独特の検査法によって検査し、上中下の品質に格付けする。中でも特等品として天上物(第一位随一、第二位準一、第三位天上の称号がつけられる。随一はいつの頃からか、瑞一と書くようになった)になった藍玉は、その藍師に対し藩から賛辞を

贈っている。これは藍師にとって非常な榮譽としたらしい。私たちの郷土川島では、そうした天上物の榮譽を得た藍師として、天保三年に藍師屋号へ角すなわち谷村家が「天上」の榮譽

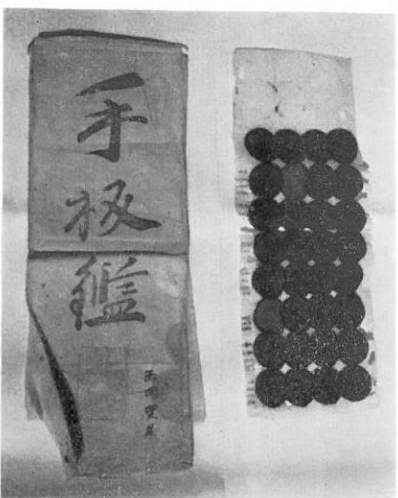


藍玉の一部を採って、良否を検査するに使う道具(手板法) (岡本一良氏提供)



手板の方法によってできた藍玉の検査するところ、藍師はそれぞれこうして検査してから、藍市に出荷する。藍市では目利役が役人立会で改めて検査することというまでもない。

を得て、「麒麟鳳璫」(きりんほうとう) (きりんのつ、ほうおうの玉で、珍しく稀な意味)の賀辞を受け、「古今無雙」(古今にならばものなしの意)と評記され、売価として替二百六〇匁の高価に定められているが(三二八頁写真参照、替とは藍玉売買の単価をいう、ただし年によりその価異なる)、天保十二年には屋号「力」阿部家(阿部勝右衛門の子、孫太郎)が、「随一」の最高の榮譽を受賞している。その他にも、こうした榮譽に輝く藍師もあったことであろうが、残念ながら記録に接しない。



藍玉の手板鑑
これとして、藍玉の
標準を、でき上がった
製品を検査する。(岡本一郎氏提供)

天保十二年の阿部家の受賞した最高の榮譽である「随一」に対する藩からの替辞は次のごとくである。

力(註7)
一青雲(註8)
一挙

天保十二辛丑年、藍精(註1) 醜権(註2) 古今稀(註3) 有命(註4) 舊例於(註5) 藍(註6) 権(註7) 各評(註8) 其品色(註9) 甲乙(註10) 官命(註11) 鑒賞(註12) 之餘、撰(註13) 其上(註14) 第(註15) 以(註16) 為(註17) 隨(註18) 一(註19) 玉、ハ旧(註20) 賞(註21) ハ黒書(註22) ナレドモ、令(註23) レル加(註24) ハ舊(註25) ニ一等(註26) 故書(註27) スルニ以(註28) テテ金泥(註29) ニテ異(註30) ニ其貴(註31) 一(註32) 百二十星(註33)

註1 藍を精製したもので、すなわち藍錠のこと。青藍を固めたものをいう。江戸時代末期から明治期にかけて作られており、この史料は、天保十二年すでにつくられていたことを実証する重要なものである。

2 醜権は専売のこと。

4 見分けはめること。

6 一百二十星は、売価が一星(一個)につき一百二十匁であること。なお、へ角 天保三年天上の賀辞の式百八拾替は替一百六十匁の意味。

7 藍師の屋号。

8 一等群をぬいた優良品で、多くの利益を得るとの意味の賀辞。

この替辞の主要の意味は、「精製された藍専売は、古今稀有である。旧例の藍専売では、品質の甲乙を評定し、藩が命じて鑑賞の上、その上等の等級を撰んで「随一」とする。随一の旧賞は墨書であったが、旧来より一等を抜き出ている故に、墨書に代えて金泥で書き、その貴種たることを区別するのである。その売価は一星(一個)につき百二十匁である。」ということであろう。

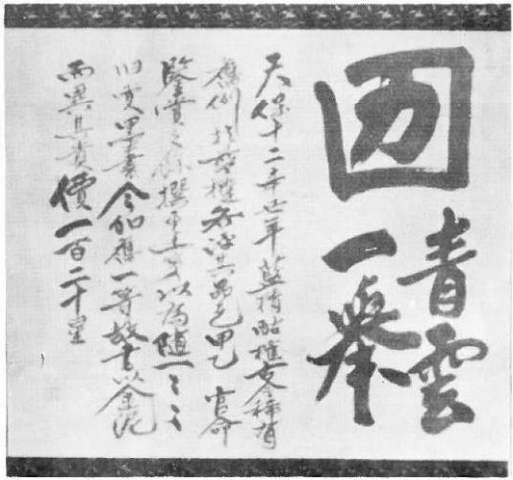
藍玉は、藍市の入札によって、阿波の内外から集まった藍商人に売却される。藍商人は、落札した藍玉を引き取り、全国の紺屋に卸売りの方法で店売りするか、あるいは小売りの方法で全国を行商するか、ともかくいずれの方法を取ろうと、阿波藍の声価の下に売却するのであった。全国の紺屋は、阿波藍を使用することを誇りとし、阿波藍を染料とするということによって一流の紺屋と認められたので、価格をいとわず阿波藍の入手に競争したのである。したがって藍商人の利益は大きかったとみてよい。

藍師で藍商人を兼ねるものは、その利益は二重となり、膨大なものであったらしい。私たちの郷土川島にも、藍師で藍商を兼ねた家がかなり存在していた。今でも、大きな納屋や土蔵を幾棟も列べた大規模の家屋を備えた屋敷や、そうした屋敷跡と見られるところがあるが、これは藍寝床の作業場、葉藍や藍玉の収納場の名残りであり、藍師藍商の裕福さを物語る跡であろう。

私たちの郷土川島で、近世から藍師・藍商として豪商の名を得たのは、次の家々である。すなわち美濃屋、中屋、谷村家、阿部家、中村家、岡本家、喜多家、後藤田家である。その他にも有力な藍商があったと思われるが、史料を入手することができなかった。

美濃屋は、享保年間、初代中藤右衛門が桑村に居住し、脇町の稲田氏に仕えて中小姓役を勤めていたにはじまり、いつの頃からか、藍販売に従い、巨富を積んだといわれ、主として伊予地方に販売先を持っていたことである。鴨島町新開地の中平助氏(農器具商)はその子孫である。

中屋は、屋号をへ三とし、義濃屋の初代中藤右衛門の四男中政治が分家して一家を創立、中家を称して藍販売に従事したことにはじまり、二代浪之助にいたって商売は繁昌をきわめ、以来代々藍商として規模を拡大、近世末期には備後国尾道東土堂町(広島県)に藍の出店を持ち、また江戸にも(現在の白木屋デパート近く)間口七間もある大店を構えていたということであるから、かなり手広く販売していたことと思われる。川島の中美智子氏はその子孫であって、尾道における藍販売の記録である慶応四年の「萬本帳」を所蔵されているが、藍販売の実状を知る好資料である。



随一 阿部鉄太郎氏提供



天上一 谷村靖氏提供

川島町史上巻 328P 昭和54年3月31日 川島町発行

註 中浪之助は稲田家御家中筋目書(猪井達雄編)によると「文化十四年文中佐右衛門稲田家に召し抱へられ文政九年八月相
続し徒士格として奉公」とあり、従ってその側藍商を営み豪商として栄え主家稲田家に多額の献金を行ったらしくその資
料記録も中家に現存する。

谷村家は、屋号をへ角としているが、古くは姓を古谷と称し、七代清三郎は稲田九郎兵衛の中小姓格の身居みすわりを
有していたが、姓を川村と改め八代平三郎につづき、九代次郎(天保年間)の時さらに谷村と改めるにいたっ
た。藍作から藍玉製造までを一貫作業として経営、ついで藍販売に乗り出したもので、藍商としては江戸伝馬町
に小店を有し、安政二年十月二日の安政大地震で大きな被害を受け死者も出たというから、かなり手広く販売し
ていたことと思われる。

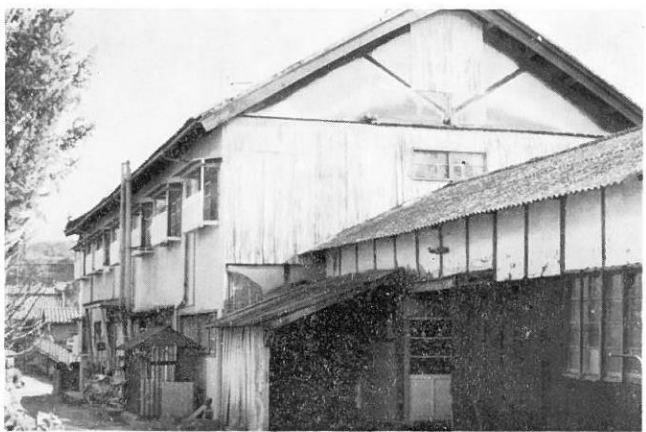
阿部家は、屋号 **力**かぢ といい、元祿の頃阿部孫三郎が、藍玉づくりに従事したことからはじまったと伝える。
子孫これをうけつぎ、しだいに盛況を呈して、ついに天保十二年藍市において、「随一」の受賞を見ているほど
であるが、そうした藍師としての成績をあげるかたわら、藍販売にも従事したようであるが、その次第はわから
ない。明治期になって、阿部家は醸酒工場や製糸工場の経営に転換、藍作り藍販売は片手間につづける程度とな
ったらしい。阿部鉄太郎氏(大阪市阿部野区阪南町二一五居住)はその子孫で、上記の「随一」の表彰状を保存
されている。

中村家(大字桑村字南寺)は、近世末期から大正初期にかけて藍製造に従事し、広く藍販売も手がけていた
が、現在同家(当主中村博夫氏)屋敷内に建てられ、現在岡本縫製工場となっている約三三〇平方メートルの木
造瓦葺一棟は、藍寝床として染を製造した建物の名残り、往年の藍製造の活況をしのぶことのできるようすがで
られている。

あろう。

岡本家は、屋号へ力と称し、近世中期頃に藍師藍商として出
発、明治期を経て大正期までひきつづき藍師藍商として生きつづ
いた家柄で、おそらく私たちの郷土川島の藍商人としては最後の
一人であったろうといわれている。藍師として、藍作から藍玉製
造までの一貫作業を営んで来たこと谷村家と同じである。藍商と
しては、淡路に小店を持ち、淡路一円は岡本家の独占販売圏であ
った。大字岡山の岡本一良氏はこの子孫で、現在も藍玉作りの巨
大な臼や、藍玉の検査に用うる手板道具など(写真参照)を保存
されている。

大字桑村字鍛冶屋敷の喜多家(屋号へ加、現在板野郡板野町居
住後藤田増一氏はその子孫)や、屋号寿山の後藤田家(現在、
山口県徳山市居住、後藤田千一氏はその子孫)は、藍業盛んであ
った頃には、藍師藍商としての家商に教えられていたのであろ



藍寝床として染を製造した建物

う。

これらの藍商は、藍商の中でも豪商と称せられる家であろう。私たちの郷土川島には、こうした豪商以外に、
藍師藍商が存在していたと推定される。仲買人にいたってはかなり多数あったであろう。その中でも、近世末期

から明治期にかけて、藍商として活躍した著名な人々として伝えられているのは次の人々といわれている。

氏名	屋号	住居地	現在の当主
阿部 權三郎	㊦	山田	阿部 勝行
阿部 速三郎	㊧	神後	阿部 賀三郎
岡本 秀三郎	㊨	岡山	岡本 一良
河村 茂平	㊩	宮ノ島	(不明)
喜多 亀三郎	㊪	桑村	板野郡板野町 後藤田 増一
重本 庄三郎		桑村	重本 喜敏
後藤田市三郎	みのや	桑村	後藤田 清
後藤田 千一	すやま	桑村	山口県徳山市 後藤田 千一

以上に述べた藍師藍商は、明治末期藍の急速な衰微に伴って、どんな運命をたどったであろうか。廃業か転業か、そして成功か不成功か、それは下巻において詳述の予定である。

阿波藍が、全国に冠たる地位を得たのは、その品質の冠絶した優秀性や、藍商人の全国津々浦々へ伸びた販売への苦心努力もさることながら、徳島藩が藍作を奨励する一方で、価格と品質の下落を防ぎ、阿波

藍の声価を保持するために、藍作から販売まで全面的に強力な統制を加え、官有民営にも等しいような監督を怠らなかつたことが大きく原因しているとみる。これはひとえに、藍に課税して、藩の収入増加を企図したからに他ならない。徳島藩の財政は、藍課税に大きくのしかかっていたのである。

しかしいつの時代でも、どんな社会でも、人は課税負担を忌む。宝暦六年藍の大凶作を動機として、藍作税の軽減、藍師株の廃止を要求して、大規模の藍作農民、藍師全体のいわゆる藍一揆が勃発せんとして、その寸前に発覚し、首謀者名西郡高原村庄屋京衛門ら五名は処刑される悲劇を見たのであるが、その発覚の端緒をなしたの

は、私たちの郷土川島の一僧侶の密告によるといわれている。すなわち一揆の首謀者が、閏十一月二十八日農民は鮎喰川原に集合して大挙城下に押し寄せ強訴するようにとの廻文を、麻植・名西・板野の村々の寺院を通して檀家の農民全体に知らせよう廻付したのであるが、その廻文を添えて藩に密告したと伝えられているものである。未然に発覚してこの一揆計画も挫折したが、その結果課税の減少を来したことは事実であり、この密告の当否を何と考えたらよいであろうか。それはともかく、これも藩の収入増加を企図した上に生じた悲劇とみる他はないであろう。

一 阿北の中心川島

川島の土地は、上桜城や川島城の故地であって、いわゆる城下町としての形態の萌芽を生じつつあったものと考えられるが、それらの城郭が廃亡した後も、いわゆる近世の郷町として目せられ、近郷近在の農民の自給自足生活では賄い得ない生活用品、生活道具の需用に応ずる店々が集中していたのである。

こうして川島は郷町としての性格を備えると共に、近世から伊予街道に沿う宿場町として、また吉野川を上下する川舟の寄航地としての性格を兼ね備えていたが、その上に明治期に入っては、郡役所をはじめ諸役所が続々と川島に集中したので、官庁街として近隣諸村の人々の往来も繁く、したがって商店も軒をならべるようになり、阿波北方の大きな中心地として商店街の形成を見たのである。その中心は、川島の中でも、「川島の浜」であったと思われる。何となれば、近世中期頃から大正期のはじめ頃まで、藍関係の舟や、筏乗りの寄航地であり、東山鉦山関係者の出入りも多く・化粧品・売薬・金物・その他日用雑貨の行商人宿もあつたし、藍関係者および大正期以後では繭糸業者や仲買人の宿泊者も多かったからで、川島浜の賑わいは、現在からは想像もできないほどであった。

二 藍師藍商の街川島

以上、川島の街の歴史的な性格を概述したのであるが、こうした街の基盤の上にか、あるいはそうした基盤が因

となり果となつてか、藍業の盛んな時期には、大小の藍師藍商や藍仲買人、繭糸業の盛んとなった時期には、これまた大小の繭仲買人や繭糸業者が集中し、その中には藍成金、繭成金、糸成金としてその豪勢さを誇り、その資力に対する信任の上に立って、諸種の近代的事業を遂行する大小の実業家が続出したのである。

まず藍師藍商からみよう。

藍師藍商については、近世末期が中心ではあつたが、それに付加して明治以後の隆盛期も上巻三二九頁〜三三三頁にかけて詳述したが、以下藍業の衰微を含めて追記することにする。明治二十九年十月二十七日徳島市堀裏町中山民太郎編集発行にかかる徳島県藍商繁栄見立一覧表をみるに、私たち郷土の藍師藍商として一〇名がその名を列ねる壮観で、そのうち惣後見役として後藤田千一、大島寛太郎の両名が見えている。これらの方々は、大島寛太郎氏が児島村の人である他はすべて桑村の人であることは、桑村の藍業における位置の重要性が看取できようか。

備考 これら一〇名の方々のうち、一部の方々は上巻三三二頁にすでに記述した。

惣後見

△	桑村	後藤田 千一	(△は「すやま」と読みしめている。)	△	児島	大島 寛太郎
△	桑村	喜多 亀三郎		△	桑村	重本 庄三郎
△	桑村	後藤田 甚吉		△	桑村	後藤田 徳三郎
△	桑村	中村 邦三郎		△	桑村	後藤田 徳三郎
△	桑村	岡本 秀三郎		△	桑村	浪之助
△	桑村	後藤田 吉三郎		△	桑村	(以上順不同)

以上は明治二十九年藍業隆昌の真っ最中の藍師藍商である。この隆昌は、次表の阿波藍祖業継承者人名録(大正六年四月、名西郡高原村 宮田有馬刊行)に示された子孫によって、継承されたのである。しかしもはやその実態は、衰微一路を辿ったのであって、往昔の盛観はなかったのではないか。明治末期から大正初期にかけて、藍師藍商の多くが没落したり、没落寸前にあつたようで、下の人名録もそうした状況の中の生き残つた藍商人とみるべきか。時代の推移とはいいながら、さしも日本全国の染料界に君臨した阿波藍師藍商の急速な没落は、私たち郷土の歴史の上に大きな明暗を投じている意味で感慨せつなるものを覚える。

阿波藍は、明治末期に急速に衰微したことしばしば記述してきた。しかし全く絶滅したわけではない。大正期から昭和期も戦前にかけて葉藍栽培農家も、藍師藍商も細々ながら存在して、需要に應えていたのである。それは、阿波藍がすこぶる優秀で、その染物は洗えば洗うほど地合いが勝れて独特な風趣をかもし、久留米がすり、西陣織、しじら織など有名な染物には阿波藍は不可欠なものであつて、



藍商 阿部貫一氏の商標
英語商標で文明開化期の藍業隆昌を思わせる

培どころでなく、全滅したのである。ただ戦後も、最近になってやはり阿波藍の特色が認められ、伝統文化の良さに魅了された一部の人々の需用に応じて、葉藍栽培農家や「すくも」の製造人が、僅かではあるが伝統技術を生かして製造販売に従事しているが、私たち郷土にはその影だに見出せないようである。

阿波の藍商は、近世後期より、全国を国別に藍行商する者を決めていた。それは勝手に行商すると競争が激化し、価格の下落をおそれた統制の結果である。近世ではそれが嚴重で藩の強力な規制下にあつたが、明治以後は自由競争の時代であつて、それほどではなかつたにせよ、やはり藍商人相互に自治的に監視しあいその販路は守つていたようである。明治十六年の藍商取締会所各国売場組合名簿と、昭和十八年の阿波藍同業組合販路地区区域人名表に、私たち郷土の藍商人の国別販路をみると次のごとくである。

阿波藍祖業継承者人名録	
<p>山本 徳左衛門 後藤田 文五郎 重本 庄三郎 後藤田 徳三郎 明石 清平 大島 頼太郎 中西 利之吉 四井 守次郎 中川 愛蔵 赤澤 高太郎 角野 民蔵 後藤田 徳太郎 須藤 岩之助 堀 石多蔵 山口 實太郎 中村 邦三郎 後藤田 與四郎</p>	<p>大島 寛太郎</p>

阿波藍祖業継承者人名録

西洋輸入の化学染料など、とうていおよばなかつたからである。昭和十八年調査の阿波藍同業組合販路地区区域人名表にも、それぞれ国別の販路に十二人の藍商人の氏名が列挙されていることは、衰微したとは言いながら、特殊な用途のための阿波藍が余喘を保っていることを、私たち郷土の商人にも見ることができるところである。しかし、それも今次大戦に入つて、食糧政策の上から、少しばかりの面積であっても、藍裁

これによると、川島や学島の藍商人は、主として近畿、東海、北陸、山陰山陽、北九州を販路としていたようである。すでに藍衰退した昭和十八年九月調査でも、余剰的なものではあろうと思うが、そうした形式が残っていることは、阿波藍の長い影を感じる気がするのであろう。

藍商取締会所各国売場組合名簿 明治十六年

地区名	住所	氏名	地区名	住所	氏名
第二 伊賀・伊勢・志摩 尾張・三河・遠江 美濃・飛騨	児島村	大島 半作	第十八 豊前	児島村	大島 半作
第四 加賀・能登・越前 越中	桑村	中村 邦三郎	第十九 豊後	児島村	大島 半作
第十二 播磨・若狭・丹 後・丹波・但馬	桑村	後藤田 直平	第二十二 肥前	桑村	喜多 亀三郎
第十五 安藝	桑村	祖父江 佐吉	第二十三 肥後	児島村	松本 太一
第十六 石見・出雲・因 幡・伯耆	桑村	川村 宗平	第三十 淡路	桑村	岡本 秀三郎
	児島村	後藤田 慶次郎	第三十四 大阪問屋	児島村	市原 岩吉
	児島村	市原 虎蔵		学村	市原 岩吉
	児島村	藤川 治		三ツ島村	新居 芳助
					加本 直吉
					阿部 清助

阿波藍同業組合販売地区域人名表 昭和十八年九月

地区名	住所	氏名	地区名	住所	氏名
紀伊	川島町大字桑村	後藤田 直三郎	播磨・若狭	川島町大字桑村	伊勢 豊三郎 (現在 萬一)
(注 勢 伊勢・尾張)	〃 大字川島	柴田 儀資	(注 播磨・若狭)	〃 大字桑村	後藤田 千一
			安藝		

地区名	住所	氏名	地区名	住所	氏名
甲(注 甲斐・信濃)	学島村	後藤田 嘉頼	大 阪	川島町大字桑村	伊勢 邦太郎
太 阪	〃 大字吉本	逢坂 榮太郎		〃 大字川島	柴田 儀資
	川島町大字川島	阿部 速太郎		〃 大字桑村	後藤田 直太郎
	〃 大字桑村	岡本 秀三郎		〃 大字桑村	中 辰三郎
	〃 大字桑村	後藤田 直三郎		〃 大字桑村	重本 庄三郎

阿波藍譜史料篇下による。

藍師藍商が没落したのは、安価な印度藍や西洋の化学染料の輸入普及で、今まで染料と言えば藍、藍と言えば上質の阿波藍、すなわち阿波藍一色で塗りつぶされていた染料が、急速に需用減退したために他ならぬ。

したがって藍染料の需用減退すれば、藍師藍商も減少、ひいては葉藍栽培の藍作農家があがりたりになるのも自然である。次表の旧川島町区域の葉藍作付反別推移表をみるに、明治二十八年を頂点として、明治四十年代に入ると、急速に栽培反別は減少、再び回復することなき推移を辿っていることで、上述の藍の運命をみつめることができよう。

この阿波藍の川島地区内(学地区分は不詳)の作付反別の推移概数は次のとおりである。

旧川島町地区葉藍作付反別の推移

明治二十四年	一三五ヘクタール	明治二十八年	一六〇ヘクタール	明治三十四年	六〇ヘクタール
明治四十四年	七ヘクタール	大正十年	三ヘクタール	昭和五年	二ヘクタール
昭和三十五年	六〇アール	昭和五十年	七〇アール		

三 繭糸業の街川島

以上述べた藍師藍商は、藍業衰えた後にはそれと運命を同じくした者もあつたが、また衰えた藍業に代わって急勃興した繭糸業にいち早く転身し、繭糸業で富を築き上げたもの少なくない。結局、藍と糸とが、明治大正期の川島の富家を生んだといつてもよいであらう。

繭糸業者については、本書第二十三章 農業の進歩(三) 養蚕どころ の項で詳述した。この項で詳述するのが順序であるが、養蚕業と密接な関係を持つことから、また資料入手に前後した関係上、ちぐはぐになつたこと読者のご了解を願いたい。

四 分限者の街川島

川島の街には、藍成金、繭成金、糸成金として富を築いたいわゆる分限者ぶんげんしやと称せられる富家の巨大な家屋や店舗、またその経営する工場が集まっていたのであつて、川島は一面金持ちの街でもあつたといつてよい。

川島では、「今千両」ということばがある。千両は大金で、容易に調達できるものでない。しかし川島の金持ちちは、千両ぐらい今すぐにでも調達するという意味で、いかにも経済力に富む川島の成金をいいあらわして妙である。

こうした分限者の中で、後藤田家一族は著名である。次のような俗謡があることは、後藤田家一族の繁栄を羨望した結果であらう。

寿山すやま金持ち 一山いつさん地持ち 貧乏人には娘持ち

注 寿山は後藤田千一氏の屋号、一山は後藤田徳三郎氏の屋号。

後藤田家の本家は、後藤田徳三郎氏の家である。「一山」の屋号を持ち、代々大字桑村一〇九番屋敷に住居、徳三郎氏は明治四年五月十二日英太郎氏の長男に生まれた。大正二年氷蔵庫をはじめ川島に建設、養蚕の進歩に貢献、従業員五〇人、三五釜を有する蒸気製糸工場を経営し、繭糸業界に大きな存在となつていたことすでに述べたところである。大正二年十一月二十九日徳島市で死去。

後藤田千一氏の家は、千一氏の祖父が右述の後藤田本家、徳三郎氏の先祖、すなわち、五代目の後藤田甚吉氏(安永九・一一・二四死)の時に分家して、屋号八(すやま)と称したにはじまり、代々大字桑村一〇八番屋敷に住居、千一氏は父貞之助氏の子として明治十一年八月十一日生まれ、代々の藍師藍商で築き上げた資力に物言わせて、私設の徳島鉄道の敷設かふせうを大串龍太郎氏ら当時の県下の名士と協力、明治三十年着工、また明治四十年に関西水力電気株式会社を創設して、四国ではじめての水力発電をおこし、さらに広島市に広島銀行を創立するなど大型の企業を数々経営出資するなど私たちの郷土のみならず、町外、県外に活躍する実業家たる半面、徳島の漢学者岡本韋庵に師事漢学を学び、俳句もよくして雅号を寿山じゆざんと号した。おそらく屋号の八(すやま)からとつたものであらう。

注 屋号は普通八の下に記号があるが、後藤田家の場合何もなく、「すやま」と称していたのである。

後藤田千一氏は、俗謡にも寿山金持ちといわれたように、祖父の代から藍師藍商として、巨富を積み、分限者多い川島でも豪商として名高く、吉野川の水が尽きるとも、寿山の金が尽きることあるまいとさえいわれたほどであった。明治四十一年に今までの山田・宮ノ島・川島・桑村の四小学校を、当時県下でも稀な四小学校合併という形で南寺に大規模の川島小学校を建設したのも、後藤田家が建設費の大半を寄付したためといわれているので、ともかく後藤田千一氏は分限者多い川島でもきわ立った存在であつたらしい。

しかし千一氏は、大正二年の繭糸相場の大暴落で致命的な打撃をうけ、大正六、七年頃に広島銀行や尾道で経営していた繭糸店を整理するため桑村の家その他すべてをたたんで広島市に転出、その後さらに東京に移転したが、その後は不明である。ここにも栄枯盛衰の光と影を見る。

後藤田千一氏の番頭として、千一氏の経営する事業を補佐、千一氏をして巨富を得せしめるにあずかって方あつたといわれている人に、須山長兵衛氏がある。千一氏が、藍会社を徳島市船場に設立、藍市場の元締めとなり、関東方面にも売場を開設し、東京中心に阿波藍販売の独占権を握り、その収益は巨大なものあつたが、すべてこれ番頭須山長兵衛氏の才画指揮のいたすところで、千一氏は長兵衛氏に全幅の信頼を置き、仕事を一任していたといわれている。その結果、長兵衛氏もまた財を積んだという。

川島町内の久保田地域など一部の神社の秋祭りに、神輿や屋台を出すにも、後藤田本家と須山家が費用の多くを負担したので、「いっさんじゃ、いっさんじゃ」と掛声するのも後藤田本家の屋号一山をたたえる掛声であり、また「ちようさじゃ、ちようさじゃ」と掛声するのも、須山長兵衛氏をたたえ「長さん」が転化したものと、巷間（こうかん）の一部で伝えられているそうであるが、真か偽か。

このように後藤田本家と共に一部神社の神輿・屋台の掛声にまでなつたとの伝えがあるほどの須山長兵衛氏も、広島県出身の人で、一時上述の広島銀行の支店長をしていたこともあり、明治三十九年死亡という以外に確実なことがわからない。町史編集室でも種々な方法で調査したが、古老の記憶にも誰一人として無いとのことであり、實在の人物であつたことはまちがいないと思うが、詳細は今後の調査にまつより他ない。なお篠原雅一著「阿波商売今昔」にも一部ふれていることを付記する。

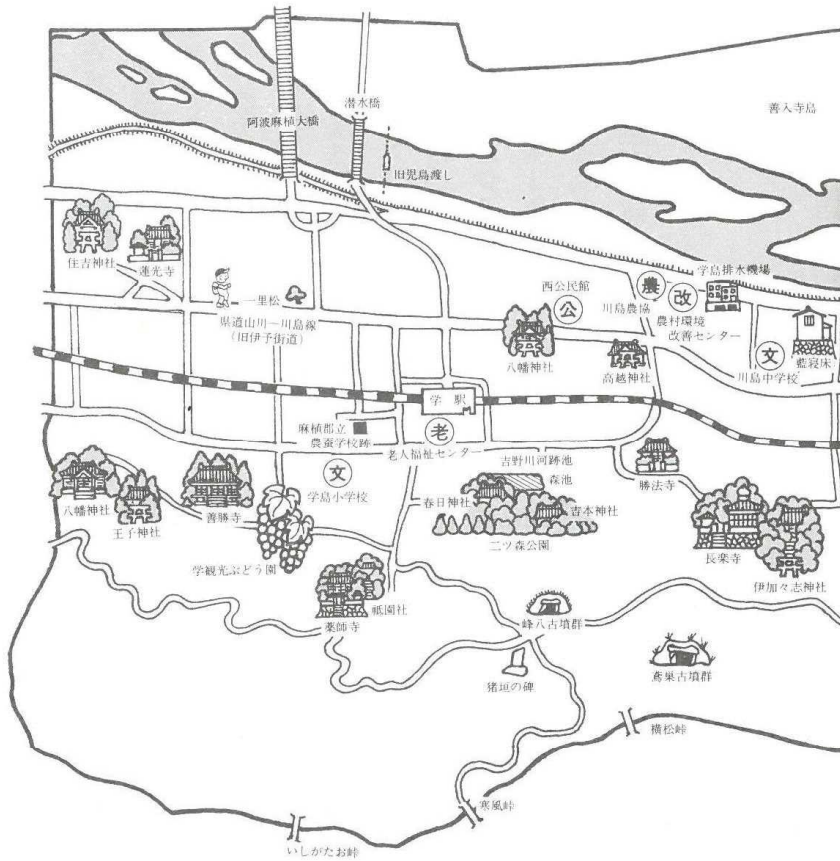
後藤田家の一族に後藤田保一郎氏がある。保一郎氏の祖父の代に、一山の屋号の後藤田本家より分家した八の屋号の後藤田家（前述の後藤田千一氏の家）より分家して、屋号を新八（しんすやま）と称し、分家のまた分家であるが、保一郎氏は、嘉永四年五月三日父儀十郎氏の長男として生まれ、藍商の家を継ぐ半面、繭糸業にもいち早く着眼し、明治二十一年蚕糸社を設立、繭糸業をおこし、製糸の伝習を兼ねたこと既述のごとくである。明治四十五年一月十一日京都で死去。

後藤田保一郎氏の孫、後藤田元（もと）さんは、山川町に現存する。

以上、後藤田家一族を一例として、明治大正期における藍業、それにつづく繭糸業で財をなした川島の街の歴史的特質をほぼ描いたのであつた。もっと精細に描けば興味深く、筆者も関心を持ったのであるが、なにぶんにも資料の入手ができないので、やむを得なかつた。しかしこうした隆昌も今は如何。

時代の有為転変はきびしい。昨日の紳士、今日の乞食となる。珍しいこととしない。藍と糸で知られ、分限者を出した川島も、藍と糸との暴落衰退で変わった。分限者といわれ、羨ましがられた人々の後は今いずこ。夏草にすだくつわものどもの夢の跡は、古戦場にのみ限らない。人生の悲喜、社会の興亡、ここにきわまる。川島に

ふるさと川島 案内図



吉野川市(旧町村)発行歴史書 藍に関する記述

ふるさと川島 6,7P 昭和59年3月31日 川島町・川島町教育委員会発行

14 岩の鼻

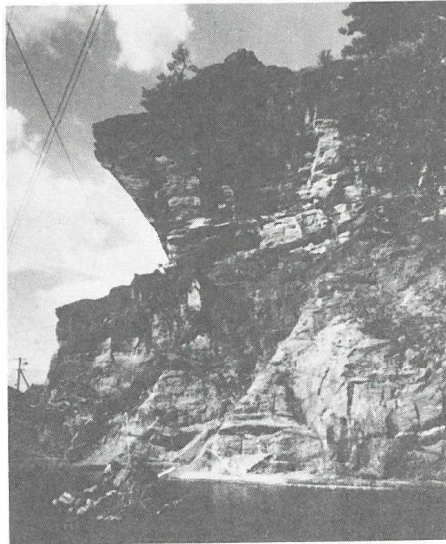
岩の鼻は、吉野川に大きく張出した丘で、結晶片岩（塩基性片岩）のかたい岩盤でできている。その岩頭に立つと、展望は大きく開け、吉野川を挟んで、南方には高越山から種穂山を経て、穴吹方面を望み、北の方では、阿讃山脈の城王山から大滝山や竜王山を経て、池田の雲辺寺山が望みでさる。

その視界は、阿波・麻植・美馬・三好の西阿四郡に及び、昔ここに川島城（天守閣はない）を築き、西阿の守りとしたのも、無理からぬことである。元和元年（一六一五）、その城は廃城となったが、その後この地に西民政所が置かれ、さらに、時代とともに麻植郡役所・阿波麻植地方事務所・警察署・税務署・区裁判所など、いろいろな役所が置かれ、川島は、常に政治や教育の中心地として、今日に至って

いる。

また、大正十三年には、この一角に忠魂碑が建立され、明治維新以来、護国のために殉じられた人々の英霊一六一柱が合祀されている。

さらに、この一帯は、公園として遊歩道や展望台などが設けられ、町民の憩いの場となるとともに、新四国の霊場もつくられている。



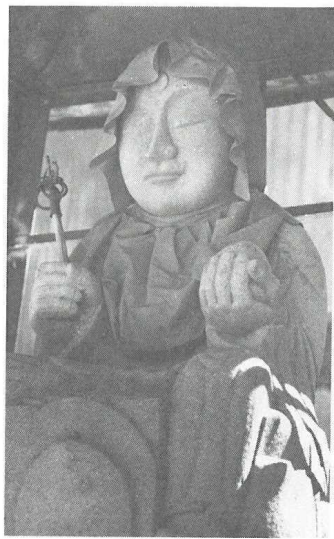
岩の鼻の巨岩

ふるさと川島 22,23P 昭和59年3月31日 川島町・川島町教育委員会発行

15 地蔵さん

赤いよだれ掛けをして、右手に錫杖、左手に宝珠を持って道ばたに立ち、庶民の悩みを聞いてくれるという地蔵さんは、子ども好きの仏様としても、人々に親しまれている。

長楽寺の境内にある地蔵菩薩坐像は、町役場前の薬師庵から移転したもので、その台座には「日は入りぬ、月はまだ出ぬやみの夜の、六つのちまたに立つは君が身」と刻まれている。これは「釈尊が亡くなられ、次の救世主弥勒菩薩は、五十六億七千万年の後でなければ現われない。その間、末法無仏世の時代に、六道のちまたに迷う衆生を救ってくれるのは、地蔵さんである。」という意味である。地蔵信仰は、末法思想の流行した平安中期に始まり、地蔵講や地蔵盆などの行事も生まれたが、道ばたにその石



浜の地蔵さん

像を建てるようになったのは、江戸時代の後期からである。川島町内にも、大小合わせて、十余基が建立されていて、地蔵信仰が盛んであったことを物語っている。

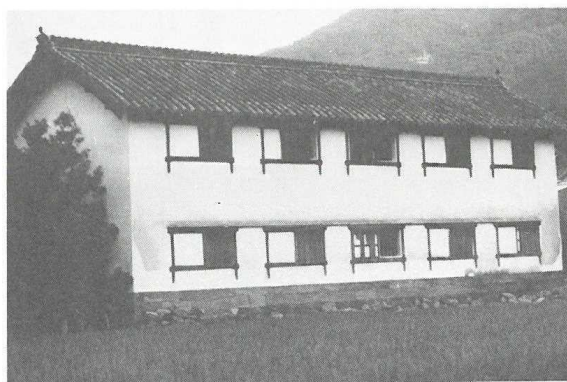
川島の浜および学の薬師寺の地蔵さんは、殿様巡視の折、余り高すぎるので、台座の一つを外したという伝説がある。川島の浜の地蔵さんの台座には、吉野川の洪水で溺死した人々の供養に建立したことが記されていて、毎年八月二十四日の地蔵盆には燈籠流しや花火大会が盛大に催される。

33 藍作と藍寝床

近世後期から明治末まで、川島町は優良な藍を生産し、藍師が活躍した土地であった。

藍は節分のころ苗床に種をまき、七十五日ほどで畑に移植する。その後も施肥、中耕、灌水のための水取りなどに多くの手間を要する。そして七月中旬早朝に刈り取り、夜小さく切っておく。翌朝庭に広げて藍摺ですったり、唐竿でたたいて天日で乾燥させ、唐箕で葉と茎を分けて、俵につめる。この作業を「藍粉成し」という。「阿波の北方起上り小法師、寝たと思つたら早起きた」という作業歌のように藍作は重労働の連続であった。

藍師は、葉藍を、寝床で寝させる。寝さすというのは醗酵させることで、そのための建物が寝床である。寝床はふつう白壁の二階建てで、格子のついた



現在に残る藍寝床 (桑村・後藤田重雄家)

て、庭でおおい醗酵させる。十日ほどで切り返して水を打つ。これを十数回くり返すと藍がでる。葉草は玉臼で搗き固めて藍玉にし、全国に売りさばいて、藍染めの染料にしていた。

現在も町内にはいたる所藍寝床を見ることが出来る。

54 善入寺島

善入寺島は、吉野川の真中にある中州で、その面積はおよそ五〇〇ヘクタールに及ぶ。現在、耕地は三五〇ヘクタールで、本町や市場町など、九〇〇余人が占用し、その耕作に当たっている。土壌は、吉野川が運んできた沃土で、サツマイモやスイカ・ゴボウ・馬鈴薯・大根などの栽培に適し、近年は水稲も栽培されて、本町の重要な農業生産地になっている。

ここには、もと宮の島村や粟島村など、いくつかの村があり、人家が五〇〇戸、三千余の人が住んでいた。当時は、学校が二校あり、浮島八幡宮などの神社もあった。毎年の例祭には、近郷から多数の屋台が集り、御輿が吉野川を渡御するなど、非常にぎやかであった。

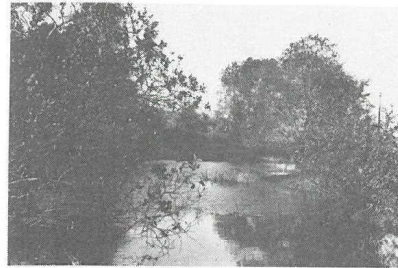


善入寺島全景 (峰八より撮影)

そこで住民は、長く住みなれたふるさとに心を引かれながらも、大正四年善入寺島から移転、全員が立のきを終った。現在、城山には移転の碑がある。

52 吉野川河跡の池

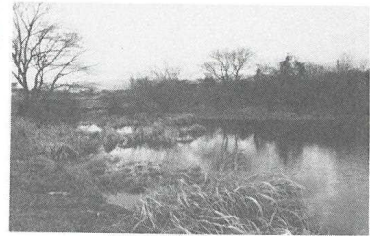
吉野川は、古来四国三郎と呼ばれ、荒れ川のひとつと数えられ、本流や分流が何線もある。昔は、堤防や護岸工事などが十分行われていなかったため、洪水により、たびたび流路が変わった。



森池 (二ツ森下)

地質時代の吉野川は、一時期川島町附近では、その流路がいくつもあって、その一つは南側の山麓を通り、山川町忌部の岩戸付近で、甌穴をつくり、その岩戸池を経て東へ流れ二ツ森の麓の森池に至る。さらにかずら池、浦の池、堀池、石橋池、アク池を経て瓢箪池、丸池、

久保田のウマタテ池から旧天野病院北側を流れ、東公民館西側を通り現在の吉野川へ達した。また、天神から久保田の蓮池を経て現在の桑村川付近へ流れた線、今ひとつは、山川町境付近から三ツ島の学島川付近の低地を東へ前池、長池、中須池、オチヨウマエ池を経て川島合同庁舎の西側を通り吉野川へ流れた。



石橋池 (長楽寺北方)

これらの川跡は、洪水のたびに合流したり分流して、川幅や流路などがしばしば変わり、前述した河跡の池をいくつもつくるに至った。しかし、吉野川改修後の今日では、その大部分が、そのまま残っているものもあるが、埋め立てられて農地や宅地になり、その一部がわずかに昔の面影をとどめるにすぎない。

53 潜水橋と阿波麻植大橋

川島町と市場町は、吉野川を挟んでたがいに相對している。かつては、渡し船がこれ結び、粟島渡し、川島渡し、児島渡しの三つの渡しがあった。中でも、川島の渡し場は、浜といい、吉野川を上下する川船の船着場でもあった。

昭和十年には、この浜から善入寺島へ太い鉄線を張り、岡田式の渡しとし、人はもちろん、家畜や農作物を運んだ。さらに、同三十七年には、ここに潜水橋がかけられ、今日に至っている。児島渡しは、昭和四年、賃取りの木橋がかけられたが、同三十年、コンクリートの潜水橋に代り、今日に至っている。

阿波麻植大橋は、三ツ島から吉野川をまたいで、市場町の香美に至る全長一〇八四尺、幅八尺の大橋である。昭和四十六年着工、同五十六年完成したが、

総工費は二十八億八千万円で、両側に歩道があり、水銀灯六十二基を備えた近代的な橋である。

吉野川にかかる橋としては、十七番目の橋で、徳島市の吉野川大橋に次ぐ、県下第二の長大橋である。この架橋によつて、麻植、阿波両郡が直結されたが、さらに主要地方道津田川島線を通じて香川県津田町とも完全に結ばれることになった。



阿波麻植大橋

11 金 勝 寺 山瀬西麓93番地

宗派 真言宗御室派 本尊 阿弥陀如来 檀徒 約400戸

金勝寺は、保命山長寿院ともいわれ、本尊の阿弥陀如来の立像は、行基菩薩の作と伝えられる。

当寺は、西法寺とともに阿波郡伊沢村(今の阿波郡阿波町伊沢)明王院の末寺であった。当寺も天正年間(1573~1591)に、長曾我部の戦火にあい全焼し、後に再建された。その後、古義真言宗金剛峯寺の直末となり、現在では真言宗御室派に属している。

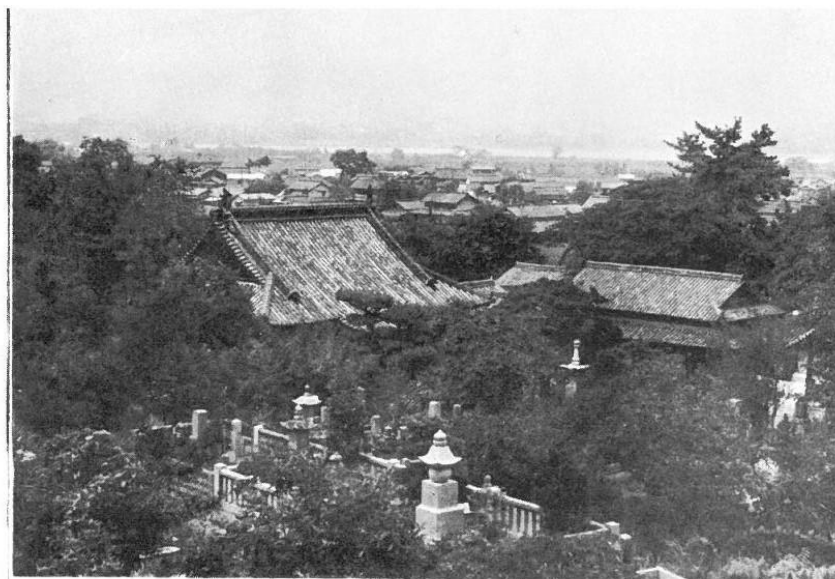
昭和15年に、現住職横田寛全によって、改築されたもので、本堂は、戦時中の物資不足を克服して再建されたものである。

また当寺は、教育と関係深く寺子屋の記録が初めて文献にあらわれたのは、享保年間(1716~1735)であるが、本町では、1740年頃(元文・寛保年間)に金勝寺で始められたのが、一番古いようだ。

当寺の境内南東に建てられた石塔は阿波屋善右衛門の供養塔である。寛政年間(1789~1800)に、大坂で藍商を営み、豪商として名声があった。善右衛門が、最隆盛期に、先祖代々の霊を祀



阿波屋善右衛門の「供養塔」



金 勝 寺

るために、建立した塔である。塔の周囲は、白い壁をめぐらし、いかにも豪商にふさわしいものである。

本名麻山家でカネヨといったそうで、山崎の出身であり、その子孫が九州に在住すると聞く。



金勝寺本堂